

駒場

2000

東京大学大学院総合文化研究科
東京大学教養学部



KOMABA 2000 SUPPLEMENT
GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場] 2000
SUPPLEMENT

表紙について

タッデオ・ガッディ
〈金銀細工場の聖エロイ〉部分

藤田吉香氏（国画会会員、1929～1999）による模写作品（教養学部美術博物館所蔵）。

原画は、イタリアの画家タッデオ・ガッディ（1300年頃～1366年頃）の「金銀細工場の聖エロイ」6号大（34.5×39.0）。藤田氏が1962年にマドリッドのブラド美術館で研究生として模写し、持ち帰ったものである。ジョットーの弟子であり名付け親でもあったタッデオ・ガッディの主要作品は、フィレンツェのサンタ・クロチェ寺院の壁画だが、その作中人物の大小、位置にはまだ近代的遠近法は採用されていないといわれる。藤田氏の模写についても同じことが言えよう。しかしそういう画を模写して、画面の不自然さを模写ゆえに拡大してしまわないようにする藤田氏の苦心は並大抵ではなかったろうと思われる。画面は金銀細工その他、あらゆる槌を使う職人の守護神エロワがまだ在俗中、材料の金を受け取りに来た姿をあらわすらしい。円光を頂くバラ色の衣装を着た、田舎娘のような人物は誰か詳らかでないが、「聖エロワと許婚の男女」という画題は他の、たとえば16世紀のフランドルの画家などにも見られるので、その画題の源となった伝説的場面をこの絵はあらわしているのかもしれない。しかし、左の王らしきものが、金貨の製作に秀でた彼を重用したフランク王クロテール2世とすれば、円光を頂く娘のような人物も聖エロワ自身ととるべきかもしれない。ジョットーが開始した絵を聖典の絵解きから解放する運動を滞らせたと評され、それを自認せぬでもなかったガッディの模写であるから、これが精彩に乏しいのはやむをえないが、しかし、この古撲謙抑の味は掬すべきだし、模写技法はこれで十分入念である。模写は精密忠実きわまる態度・技法から生まれ、しかも生きた美しい作品となりえているのは珍重するに足る。

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

[駒場] 2000
SUPPLEMENT



東京大学大学院総合文化研究科
東京大学教養学部

まえがき

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部は、いわゆる三層構造、すなわち、学部前期課程、後期課程および大学院にわたる教育と研究をおこなう大規模な組織であり、大学院レベルの高度な研究の成果が前期課程の教育にフィードバックされる柔軟な仕組みをもっている。その教育レベルの高さと緻密さは、国内はもとより国際的にもきわめて高い評価を得ている。

東京大学教養学部は第2次大戦後の学制改革によって新制の東京大学が誕生して以来、全国でもユニークな「教養学部」として50年の歴史を誇ってきた。教養学部は東京大学の前期課程学生7500人の教育に責任をもっており、さらに、3・4年生を対象とする独自の後期課程をもっている。大学院総合文化研究科は、1993（平成5）年に開始された大学院重点化によって現在の形に整備され、7専攻・系にわたる修士課程・博士課程の大学院教育を担当している。

こうした駒場の教育・研究活動をくわしく紹介する書物が、年報〔駒場〕である。この年報は1992（平成4）年に創刊されて以来10冊目となるが、大学院総合文化研究科・教養学部の自己点検、自己評価の書としてのねらいを果たしてきたといえるだろう。本書は、昨年刊行された〔駒場〕1999の追補版であり、2000（平成12）年度の教養学部・大学院総合文化研究科の最新の動向を紹介している。

今後の大学院総合文化研究科・教養学部の発展のために、多くの方からの支援、アドバイス、そして批判を期待している。

2001年2月
教育・研究評価委員会

I

2000年度における大学院総合 文化研究科・教養学部

1 創立50周年記念事業

東京大学教養学部は、新制東京大学と同時に1949年に発足し、昨年50周年を迎えた。教養学部では、昨年度からの3年間で創立50周年記念事業の期間と定めて、さまざまな記念事業を行っている。

2000年度は、昨年スタートした「教養学部50年史」の編纂を鋭意進めたほか、以下の事業を行った。

① 50周年記念シンポジウム

「21世紀の大学像を求めて」をタイトルとして、11月11日に13:00-17:30 900番教室で開催した。

プログラム（敬称略）

基調講演 蓮實重彦（東京大学総長）

開会挨拶 浅野攝郎（東京大学教養学部長）

総合司会 黒田玲子（東京大学教養学部教授）

第一部 「理系の知」と「文系の知」の総合の地平

コーディネーター 小林康夫（東京大学教養学部教授）

デモンストレーション コンピュータ・グラフィクス

河口洋一郎（東京大学大学院情報学環教授）

パネリスト 岡本和夫（東京大学大学院数理科学研究科教授）

永山國昭（岡崎国立共同研究機構教授）

西垣通（東京大学大学院情報学環教授）

長谷川真理子（早稲田大学政経学部教授）

第二部 大学教育と教養：世界平和への貢献

コーディネーター 山内昌之（東京大学教養学部教授）

オルガン演奏 James Dawson（立教大学教会音楽研究所長）

パネリスト 小和田恒（日本国際問題研究所理事長）

古城佳子（東京大学教養学部教授）

寺島実郎（三井物産戦略研究所所長）

遠山敦子（国立西洋美術館館長、元文化庁長官）

主催 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部

後援 朝日新聞社

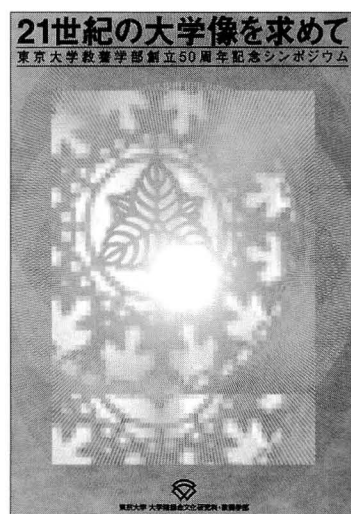
また、当日、シンポジウム終了後、京王プラザホテルにて記念祝賀会を開催した。祝賀会には、教養学部教職員OBほか、第一高等学校同窓会の方々も出席した。

なお、シンポジウムの模様は12月2日、NHK BSフォーラム番組「東大で『教養』を考える——大学教育の未来像」として放映された。

シンポジウム全体の内容、蓮實総長の基調講演の要旨については、以下の記事を参照されたい。

「朝日新聞」2000年11月26日東京版朝刊 「理系と文系の総合探る」

「論座」2001年1月号 座談会「和魂洋才」型教養を超えて



② 連続講演会

表象文化論研究室が責任母体となって、「知を越えて」と題する連続講演会を開催した。

「知を越えて」Vol. 1——「旅に学ぶ」安藤忠雄氏（大学院工学系研究科・工学部教授）

日時：5月30日（火）16:30-18:00

場所：教養学部視聴覚ホール

「学び、知を越えて」Vol. 2——「演劇・身体学び」鈴木忠志氏

日時：10月23日(月) 16:30-18:00

場所：教養学部視聴覚ホール

③ 利根川進氏講演会

米国マサチューセッツ工科大学教授・学習と記憶センター長で、1987年にノーベル医学・生理学賞を受賞した利根川進氏を迎えて、講演会を開催した。これは、本郷、駒場、弥生キャンパスで開かれた連続講演会の一部をなすもので、駒場での講演会は主に学部学生向けに行われた。利根川氏は「学生に期待するもの」と題して、会場を埋めつくした聴衆に向かい、分子生物学に興味を持ちはじめた大学時代やカリフォルニア、バーゼルでの研究生活を振り返り、最後に「(1) 強い自我をもち独自性のある人間になること、(2) 4年間の間に友人や先輩、先生との接触を通じて、自分のやりたい仕事を見つけること、(3) いったん進むべき道を決めたら、困難に遭遇しても、簡単にあきらめないこと」を若い世代へのメッセージに、講演を締めくくった。

「学生に期待するもの」利根川進氏 (MIT教授・学習と記憶センター所長)

日時：12月6日(水) 13:30-17:00

場所：数理科学研究科大講義室

教養学部50周年記念シンポジウム

薩摩順吉 (数理科学研究科／数学)

去る11月11日、900番教室を第一会場、11号館の教室を第二会場として標記のシンポジウムが開催され、会場いっぱいの聴衆が参加した。総合司会は黒田玲子教授である。冒頭の浅野攝郎学部長の挨拶にもあったように、教養学部が創設されたのが1949年、後期課程教養学科が設置されたのが1951年、なかをとって今年がちょうど半世紀ということになる。今年さらには20世紀最後の年であるということで、シンポジウムの副題は「21世紀の大学像を求めて」であった。学部長開会挨拶後の蓮實重彦総長による基調講演においても世紀の変わり目であることが強調され、21世紀に向けて教養学部が果たすべき役割が述べられた。

基調講演の後、大学院情報学環川口洋一郎教授によるコンピュータグラフィックス芸術のデモンストレーションが行われ、第一部である「理系の知」と「文系の知」の総合の地平と題したパネルディスカッションに引き継がれた。コーディネーターの小林康夫氏は文系の教授、パネリストの岡本和夫氏、永山國昭氏、西垣通氏、長谷川眞理子氏は大まかにいって理系の教授である。駒場は理系の知と文系の知が共存している場所であり、それを21世紀に向けてどのように包括的に総合していくかというテーマで議論が進められた。笑いも誘う和やかな雰囲気で行われた討論の後、「かたち」と「いのち」というキーワードをもとにして、多様な人材による多様な会話をしていくことが必要であり、駒場がまさにそうした場所であるとの指摘で締めくくられた。

後半は立教大学のジェームズ・ドーソン氏によるパイプオルガンの演奏の後、第二部のパネルディスカッション「大学教育の教養、世界平和への貢献」が行われた。読書習慣の後退とインターネットに代表される情報化の進展によって、大学生の知的背景が変化している中で、大学の教養教育は大きな転換を迫られている。教養を携えた21世紀の社会人と国際化はどうあるべきか、そのための教養とは何かがテーマであった。山内昌之教授をコーディネーターとして、国際的にさまざまな場所で活躍しておられる小和田恒氏、古城佳子氏、寺島実郎氏、遠山敦子氏による白熱した討論がなされた。

れ、それぞれの経験に基づいて、国際化の中での教養の役割が訴えられた。一致して主張されたのは、第一部と同じく多様であることを認めるという姿勢の重要性である。さらにそうした姿勢を身につけるためには一歩踏み込んだ教養教育が今後必要であるとの指摘がなされた。

シンポジウムのパンフレットとともに配布された1951年4月10日発行の教養学部報第一号復刻版には、当時の学部長であった矢内原忠雄氏による創刊の辞が掲載されている。その一部分を引用しておきたい。「東京大学内における教養学部の位置の重さは、単に全学生数の半数を包容するという、量的比重にだけあるのではない。東京大学の全学生が最初の二箇年をここに学び、新しい大学精神の洗礼をここで受ける。ここは東京大学の予備門ではなく、東京大学そのものの一部である。しかもきわめて重要な一部であって、ここで部分的専門的な基礎の知識の基礎である一般教養を身につけ、人間として片よらない知識をもち、またどこまでも伸びて往く真理探究の精神を植えつけなければならない。その精神こそ教養学部の生命なのである。」併せて、同じ復刻版にある当時の総長であった南原繁氏の言葉の一部も引用したい。「教養の目指すところは、諸々の科学の部門を結びつける目的や価値の共通性についてであり、かような価値目的に対して、深い理解と判断をもった人間を養成することである。」

ここ10年の間に他の国立大学で教養部が解体される中で、本学の教養学部はその独自性を誇っている。矢内原氏や南原氏の訴えられた精神が脈々と受け継がれている場所である。シンポジウムでなされた議論はこれまでの駒場の実績に裏打ちされた積極的なものであり、まさに21世紀に向けての発信であったといつてよい。

(「教養学部報」第444号、2001年1月10日発行より転載)



2 前期課程教育の授業外部評価(外国語)の実施

東京大学教養学部は、1993年(平成5年)に前期課程教育カリキュラムの全面的な改革と、その教育を担う組織改革を断行した。これらの改革の内容については、毎年発行されている『[駒場] 199x』に詳しく述べられている。総合文化研究科・教養学部では、こうした改革後の新展開を点検・評価するために、1993年と1996年にアンケート調査(学生・教官)を実施するとともに、毎年、自己点検・評価を実施してきた。これらの結果は、『教育・研究評価報告書1〜5』に報告してきた。

さらに、1998年には自己点検・評価資料を基に、東京大学外の有識者に外部評価をお願いした。これらの外部評価の結果は、『東京大学前期課程教育外部評価報告書第一分冊および第二分冊』として公表し、その概要は『[駒場] 1998』(10〜16ページ)にまとめた。一連の評価結果に関する分析や意見はきわめて多岐にわたっており、簡単に総括することはできない。しかし、カリキュラム改革の理念と方向性、そしてそれを支える組織についてはよく理解され、概ね高く評価されたといえる。

このように、1993年のカリキュラム改革の全体的な理念・方向性などの評価を受けたので、1999年からは、個々の科目の教育目標・内容・方法やシラバスなどの授業外部評価を開始した。初年度は、情報関連科目、物理学関連科目、およびスポーツ・身体運動関連科目の授業について外部評価を実施し、その結果は、『東京大学前期課程教育授業外部評価報告書(中間報告)』として公表し、その概要は『[駒場] 1999』(16〜23ページ)にまとめた。さらに、1999年12月には、外国語科目の評価を実施し、その結果を『東京大学前期課程教育授業外部評価報告書(中間報告2)』(平成12年8月)として報告した。この外国語授業評価の概要を以下にまとめる。

1. 授業自己点検資料の作成

1999年4月、教養学部前期課程外国語教育に関して、授業を主とした外部評価を受けることが決定、外国語委員会は各前期部会(英語、ドイツ語、フランス語、中国語・朝鮮語、ロシア語、スペイン語、古典語・地中海諸言語)主任を含む外部評価ワーキング・グループを発足させた。ワーキング・グループが第一に考えたのは、外部評価に先立って先ず駒場のすべての外国語授業の現状について包括的な自己点検をおこなうことであった。

今回のワーキング・グループの仕事はまず、基礎科目の「既修外国語」、「初修外国語」、および総合科目「国際コミュニケーション」外国語科目のすべての授業について、改革後どのように教育がおこなわれているかの実態調査をすることから始まった。改革後の外国語カリキュラムについては、たとえば「英語Ⅰ」のように、明確に目に見えるかたちでの改革(したがって内外の評価も早かった)もあれば、初修インテンシヴコースや英語Ⅱのように、小人数での教育成果が確実にあがっているものの、印刷された授業内容を見る限りでは教室での授業の実態が把握しにくいものもある。これらを部会の壁を越えて点検してみようというコンセンサスを全外国語部会で得ることができたのは幸先のよいスタートであった。異なる外国語に属する教官集団が共同の作業をしていく過程で、ごく自然に駒場の外国語教育の将来を展望する議論も出たと思う。

さて実際に700コマの授業すべてについての調査をすることはそれ自体一大プロジェクトであったが、専任教官はもとより非常勤の先生方にも外部評価のための資料作成という趣旨をご理解いただき、1999年夏学期末に近い7月、学生へのアンケートを実施することができた。アンケート項目についても、統一的な部分と、各外国語に固有な問い、さらに自由記述部分にわけ、集計にあたって、部会が今後の授業プログラムを設計していく上で参考にすべき点がひきだせるようにという配慮をした。一方、改革以来のカリキュラムについて、教務データ分析をおこ

なうことにより、学生の受講状況の実態把握につとめた。初修外国語の選択者数の変動、外国語国際コミュニケーション（以後国コミと略）受講者の増大（初修外国語すべてについても年々増加傾向にある。英語の場合は希望受講者数が多く、実際にはその半数しか登録できないという事態もおこっている）が浮き彫りにされた。アンケート結果の分析では学生の間に外国語を「負担」と感じる意識よりも「意欲」が見られたのは発見であった。さらに教材やシラバスの検討を経て、10月末、授業を参観していただく評価委員の先生方に、以下のような自己点検と評価のための参考資料を送付した。

英語関係では、「明日のクラスをもとめて」「英語教育改善の方針」「臨時東京大学前期課程教育改善推進委員会最終報告書」「英語Ⅰ達成度テスト」「大学の勉強と学力」「英語Ⅰ実施の模様」「英語Ⅰ作業概略図」「ファカルティ・ディヴェロップメント資料」「The Universe of English」「The Universe of English II」「The Expanding Universe of English」「The Expanding of English 学内版」「英語・ビデオ教材」「英語Ⅰ音声教材」「英語Ⅰアンケート」「英語Ⅰ統一試験問題」「ECS 英語Ⅱ学生振り分けプログラム」「英語Ⅱ ジャンル別出講コマ数」「英語Ⅱアンケート」「国際コミュニケーションジャンル別全希望分布・第一希望分布」「Lクラス・ビデオ教材」「Lクラス吹き替えテープ」（その他別添資料多数）、ドイツ語では、「岩崎・平尾新訂ドイツ語文法」「池田・青木 力のつくドイツ語文法」「Anne und Klaus Vorderwülbecke: Stufen International 1」「WWW上のドイツ語自習プログラムの試み」「ビデオドキュメント ベルリン・ドイツ統一の日」「ドイツ語Ⅰ」（ビデオ教材を含む）「作文授業へのE-Mail-Tandemの試み」「インテンシヴコース 教材」「ドイツ研修旅行報告書」、フランス語は、「フランス語基礎科目共通教材——ビデオ、コンセプト、教師用マニュアル、スクリプト、学生配布用テキストのサンプル」「フランス語共通教材サブ教材——音声教材とテキストのセット、音声教材コレクションデータベース」「石井洋二郎 フランス文法要説」「La Pratique du français par les entretiens sur les pays francophones d'Afrique」「インテンシヴ・コース 授業のビデオ、創作劇のテキスト」「東京大学フランス芸術文化研修旅行報告書」、中国語関係では、「基礎科目一年共通発音教材 プリントおよびカセットテープ（部会教員作成）」「基礎科目一年理系用共通教材テープ付き」「北京の風」「同一年文系用共通教材 現代中国語基礎（部会作成）」「基礎科目一年3列共通教材 CD-ROM付き 表現する中国語」「楊達ほか 聞こえる中国語」「相原 茂 上海→北京漢語行」、朝鮮語は、「生越ほか 朝鮮語初級」、ロシア語は、「ロシア語文法練習問題」「ロシア語初級読本」「解説ロシア語」「ロシア語シンタクスと作文」、スペイン語は、「ハビエル＝リャノ・上田・インマクラダ＝マルティネス 初級スペイン語教科書」「上田 学習ガイド」「EL SUR. スペイン語部会自主教材」「自主制作教材 初級スペイン語作文」ほかである。

2. 授業参観と評価

授業評価は、小栗友一（名古屋大学言語文化部長）、小林俊一（理化学研究所理事長）、松本健（公正貿易センター 国際貿易投資研究所長）の諸先生にお願いし、12月7日・8日の2日間にわたり、実際に教室に入って通常の授業を参観していただいた。参観プログラムは英語（英語Ⅰ2年生English Only Class、英語Ⅰ1年生LS リスニング・スピーキング ネイティブ・スピーカー担当、英語Ⅱ1年生R リーディング 英語 国際コミ LS ネイティブ・スピーカー担当）、ドイツ語（ドイツ語 1年生1列、ドイツ語インテンシヴコース ネイティブ・スピーカー担当ドイツ語2年生）、フランス語（フランス語2年生1列、フランス語1年生3列、ネイティブ・スピーカー担当）、スペイン語（スペイン語1年生3列、スペイン語 国コミ中級）中国語（中国語1年生2列、中国語1年生3列 ネイティブ・スピーカー担当）、朝鮮語（朝鮮語1年生2列）、ロシア語（ロシア語1年生2列、ロシア語国コミ初級 ネイティブ・スピーカー担当）、ラテン語（古典語初級）、アラビア語（初級第三外国語）、で構成され、さらに1日目の夕方は外国語担当教官との懇談会、2日目は英語ⅠのTA（ディスカッション・ルーム補佐）とのインタビューや英語Ⅰ制作現場視察も含めるというハードスケジュールとなった。初めてその言語に触れてまだ1年も経っていない初級クラスから、ネイティブ・スピーカーの教師によるレベルの高いインテン

シヴ・コースまで、多種多様なメニューを見ていただいたことになるが、それでもイタリア語、トルコ語、ベトナム語など22ヶ国語にのぼる駒場の外国語授業のほんの一部にすぎず、時間制の関係で参観していただけなかった個性豊かな授業があることはいうまでもない。また時間の都合上、どの授業も部分的にしか参観していただけなかったため必ずしも十分担当教官の意図が参観者に伝わらなかったクラスもあったかと思う。また授業のみならず、「英語Ⅰ」のビデオ・テキスト制作現場もみていただいたが、手狭な制作室に驚かれながらも「熱気」を感じていただけたのはうれしかった。当日はたいそう過密なスケジュールだったにも拘わらず、学生に混じって積極的に授業に参加してくださった評価委員の先生方に深く感謝したい。

3. 評価報告を受けて

年があらたまり、委員の先生方から早々に評価報告書が送られてきた。小栗先生は外国語教育に携わる現場の声として、小林先生は個々のクラスの運営について、松本先生はリベラル・アーツ教育という観点から、それぞれ有益な示唆に富む評価を書いてくださった。活発でインタラクティブなクラスについて積極的な評価があった一方で、どちらかといえば伝統的な（旧態依然という印象を与えてしまう）授業方法について、「工夫の必要性」ありという厳しいご批判もあった。クラスの活性化、ネイティブ・スピーカーの教官の個性ある授業法など、われわれワーキング・グループのメンバーにとってもFD（ファカルティー・ディヴェロプメント）となる経験であった。語学授業にふさわしい教室設備の問題、教室サイズも評価委員の先生から指摘された。普通教室を外国語の授業に使っている以上、最低限の視聴覚設備が必要であることはいうまでもない。

評価報告書で指摘された問題点を真摯に受け止め、それぞれの部会で今後の授業改革に生かすべく努力を続けることは、教養学部教育全体における外国語の重要性を考える者にとっての義務といえよう。実際、初修外国語の部会でも新しい授業法についての実験がおこなわれている。どの部会にとっても授業評価という今回の試みが自らの教育活動を見直す機会となった。参観という形式をとる場合、どうしてもパフォーマンス性が評価につきまとう。巷の語学学校でおこなわれるたぐいの会話練習ばかりが大学の授業であるはずがない。難解な文章とじっくり取り組むことによって他者の文化を理解する醍醐味を味わわせること、そこで新しい発想の泉を発見することこそリベラル・アーツ教育の根幹である。一方では、世界に活躍・貢献する人材には「発信型」の外国語運用能力がますます必要とされることは事実である。学生の旺盛な知的好奇心を満たしつつ、バランスのとれた運用能力を伸ばすための授業プログラムの設計は本学でこそ実行可能かもしれない。またよくいわれる学生のレベル低下（授業を難解だと訴える学生の存在）についても教える側として学生にむかう姿勢にたえずきめ細かな工夫がのぞまれるであろう。

長年の念願であった10号館LL教室の老朽化した機器の更新が、2000年秋、学部として決定されたことは、外国語教育にとってははずみともなる大きな前進であった。3月工事に着工、2001年度夏学期からは新しい機械を使つての授業が可能となる予定である。またわずか1教室とはいえ、CALL（Computer Assisted Language Learning）やVODの環境が整うことになる。学生の能力にあわせたきめの細かいCALLプログラムについては市販の教材では不十分である。今後初修・既修を問わず、東京大学の学生の到達目標にあわせた教材開発がおこなわれるべきであろう。英語Ⅰで経験したように、新しいプログラム開発に必然的に伴う仕事量と、外国語所属教官の負担の増大という問題をどうするかも残された今後の課題である。

このたびの授業外部評価については、外国語委員会、さらにワーキング・グループ準備段階から、評価委員の先生方と本学外国語スタッフとの懇談会を通して、大学における外国語教育という永遠の問題について、つっこんだ討論ができたことが大きな収穫であった。一方では専門教育につながり、他方では国際社会につながる重要な使命を帯びた外国語教育プログラムを、本教養学部が率先して示していきたいと思う。

3 DAAD寄附講座「ドイツ・ヨーロッパ研究」の開設

2000年10月、「ドイツ・ヨーロッパ研究in駒場Deutschland- und Europastudien in Komaba」通称DESKが活動を開始した。これはドイツ学術交換会（DAAD）が東京大学大学院総合文化研究科・教養学部との間に契約を結び、今後5年間にわたって年間50万マルクの財政的支援を行い、駒場キャンパスのヨーロッパに関心のある学生にさまざまな形態での援助を与え、ヨーロッパに関する優れた実務家と研究者を育てることを目的としている。国立大学が外国から公的資金を受け入れて教育研究活動を行うことには慎重に考慮されねばならない多くの問題がある。総合文化研究科では評議員を委員長とする寄付講座運営委員会とDESKの実行運営に携わるDESK運営委員会を発足させ、これに対処している。寄付講座の客員教授には、ヨーロッパ中世から現在のEU統合にいたるまでの広い学識の主で、日本語にも堪能な筑波大学の教授ハラルト・クラインシュミット教授をお招きした。DAADの財政援助によるものとはいえ、DESKが可能になったのには東京大学の蓄積する長いヨーロッパ研究の伝統と、さらには東京大学側がそれに見合う人力や設備を用意し、かつ科学研究費など研究資金の獲得に努力することも大前提である。学部は8号館の1階109番にDESK専用の部屋を提供した。DESKの目的はDAADとの契約書にはこうある。



- ドイツとヨーロッパに関する高い学術的水準の客観的かつ精緻な研究を保証する。

- 専門の垣根を越えた研究、教育、情報における学術的活動を企画支援する。

- 主として、政治学的、経済学的、社会科学的方向が重視されるが、文化的、歴史的次元も考慮される。それに必要なドイツの言語、文学、文化についての研究も保証されねばならない。

- ドイツの政治的、経済的、社会的、文化的発展におけるヨーロッパと関連した側面が考慮される。

- アジア・太平洋地域における交流センターとしての役割を果たすことが期待される。大学、研究機関の枠を越え、経済、政治、行政、マスコミ、在野の知識層を視野に入れることが望ましい。

- 日本における学際的ドイツ・ヨーロッパ研究の構築と促進のために貢献する。

- 上にあげた目的と任務の意図に合致する活動に従事するすべての人に開かれた存在であること。

- ドイツとヨーロッパに関する知識と関心を広く一般公衆に伝達する。（データベース、ホームページ、紀要、講演会等）

DESKの行う学生教育プログラムをDIGES（Degree in German and European Studies）と呼び、前期課程と後期課程の学生への教育プログラムをDIGES I、大学院生へのそれをDIGES IIと呼ぶ。駒場の前期課程には総合科目、外国語科目、さらには語学のインテンシヴ・コースや海外研修旅行など、ヨーロッパに関係する授業が数多くあるが、DIGES Iでは、DESKのプログラムに対応する「テーマ講義」を出す他、寄付講座の助手および大学院生の協力を得てトウトーリウムを行っている。こうした機会を利用して、学生間に知的・人的交流が自然発生すればこれに勝る喜びはない。DESKはDIGES I IIのそれぞれの課程で必要と思われる財政的支援を行う。個人最高二十万円の助成金を与えることにし、「助成金応募要領」を公表している。これは学部生がグループを形成して自発的に勉強会を開いたり、院生が修士論文や博士論文を作成するのに寄与することを目的としている。奨励助成を受けた研究課題を例示すれば、「ヨーロッパにおけるウェルギリウス受容」「ドイツ連邦共和国における反ナチ抵抗評価をめぐる問題」「NATOにおける包括的手段の発展について」「ヨーロッパ統合の背景にある言語教育政策」「戦間期ユーゴスラヴィアにおける文化・教育政策」等である。

1月27日（土曜日）、蓮實重彦総長と姜 尚中社会情報科学研究所教授をお招きして開催された「DESK設立記念講演会」には、東京を襲った珍しい大雪にもかかわらず、300人を超える聴

衆が集まった。DESKの全体像やここに記した事項の詳細はホームページに載っているので参照されたい。<http://ask.c.u-tokyo.ac.jp/~desk/>



4 セクシュアル・ハラスメント等の相談・防止体制

東京大学は平成11年6月「苦情処理に関するワーキング・グループ」を設け、以来、セクシュアル・ハラスメント等の防止のため、本学として何をなすべきかの問題と取り組んできた。ここでの集中的議論をふまえ、平成12年10月、東京大学ハラスメント防止委員会が発足した。ここでは、ハラスメント防止委員会発足までの経緯を記し、相談・防止体制の現状を述べてみたい。

周知のとおり、平成10年4月、男女雇用機会均等法改正により、事業主のセクシュアル・ハラスメント防止の配慮が義務づけられ、文部省は、同年11月の人事院規則10-10「セクシュアル・ハラスメント防止等」を受け、平成11年3月文部省訓令第4号「文部省におけるセクシュアル・ハラスメントの防止等に関する規程」を定めた。ここにはセクシュアル・ハラスメントの防止および排除、セクシュアル・ハラスメントに起因する問題（セクシュアル・ハラスメントのため、職員の就労上又は学生等の修学上の環境が害されることおよびセクシュアル・ハラスメントへの対応に起因して職員が就労上の又は学生等が修学上の不利益を受けること）への迅速かつ適切な対処、職員の注意の喚起・認識の深化などを含む9条にわたる義務があげられ、4月1日からの実施が明記されている。本学各部局に対して相談員の設置が要請されたのは以上のような経緯による。総合文化研究科・教養学部においても、女性教官を含む相談員が専攻ごとに配置され、相談員への連絡先（電話・メールアドレス等）がキャンパス内に公示された。

「苦情処理に関するワーキング・グループ」は、東京大学をアカデミック・コミュニティととらえ、対等な構成員である男女が互いの人格を尊重し、よりよい教育・研究・就業環境をつくりだすべく、大学独自のハラスメント防止体制を検討することを出発点とした。上記の人事院規則、ならびに文部省規程も国家公務員の職場における公正の確保、職員の利益の保護、職務能率の発揮を目的として作られたものであり、大学という場にふさわしい新たな体制をつくる必要があるのではないかという議論に立ったのである。学問の府としての大学の任務を考えれば、「職場」である以上に、教育・研究の場である。大学の主たる活動である教育・研究は職場とは異なる人間関係においておこなわれ、そこでは教育する者とされる者の間の信頼関係が前提となっている。また一方、大学における学問の自由を保障するためその構成員には多くの自由と自立性が認められている。たとえば、教員には教育において多くの裁量権が与えられており、その自主的判断が尊重される仕組みになっている。

セクシュアル・ハラスメントには大別して加害者が被害者に対して有する優位な地位を利用して相手に性的対応を求める「対価型」と、性的言動によって修学・就業環境を害する「環境型」があるとされる。「対価型セクシュアル・ハラスメント」は、教育・研究のために与えられている影響力や裁量権を教員が濫用することにより、良き指導者であり、公正な判断者であるという学生の教員への信頼を裏切り、ひいては社会の大学に対する信頼を傷つけるものである。このように、「対価型セクシュアル・ハラスメント」は大学にとってきわめて深刻な問題であり、大学はこれに対して厳正な態度で臨まなければならない。またアカデミック・コミュニティとしての大学は、そこで行われる教育・研究が個人の人格の尊重という大前提に立ち、良好な環境を整備すべき義務を負っている。特に本学においては、女子学生の数も学内のほとんどすべての分野において少数者に過ぎず、未だに圧倒的少数者である分野も少なくない。女性研究者・教員の数も女子学生の比率以上に少数にとどまっている。「環境型セクシュアル・ハラスメント」の防止に取り組む際、従来男性を圧倒的多数者とする条件のもとで形成されてきた本学の教育・研究環境の特質を踏まえる必要があるだろう。

これらの問題点に対し、ワーキング・グループは10ヶ月間の議論を行った結果、平成12年3月8日、以下の原案をまとめた。この間、全国の国・公・私立大学の膨大な資料を用意していただいた事務局にも感謝したい。また、アメリカ・カナダ等の大学の体制も参考にさせていただい

た。以下の文書のうち、倫理と体制の綱領には本学の理念が盛り込めたのではないかと考えている。これらは6月に評議会に提出、7月に決定された。ここではそのなかで、防止宣言の全文を掲げたい。

- 1 東京大学におけるセクシュアル・ハラスメント防止のための倫理と体制の綱領
- 2 東京大学セクシュアル・ハラスメント防止宣言
- 3 東京大学セクシュアル・ハラスメント防止委員会等の規則
- 4 東京大学セクシュアル・ハラスメント防止のためのガイドライン

東京大学セクシュアル・ハラスメント防止宣言

〈宣言〉

東京大学のすべての構成員は、男女の本質的平等と個人の尊厳を深く認識する。この見地から、学術的教育・研究の場である大学にふさわしい環境づくりをめざして、他の人に不快感を与える性的言動を行わない決意を表明し、そのような言動を防止するための万全の配慮と不断の努力を行うことを宣言する。

〈基本理念〉

セクシュアル・ハラスメント（他の人を不快にさせる性的言動）は、性的嫌がらせであるだけでなく、人格権の侵害ともなりうる。もとより性による上下や優劣は存在しない。しかしながら、「快・不快」の感覚を初めとして男女間や個人により様々な違いがあることも事実である。また大学は、教職員以外に学生を主要な構成員とすることで、一般社会とは異なる固有の力関係を内包している。本学のすべての構成員がこれらの点を十分認識した上で、いかなる立場であれ、男女の真の平等を正しく理解し、性別にかかわらず互いの人格を尊重するという意識を強く持つことが、大学に相応しい教育・研究環境を維持し、発展させるために不可欠である。

〈行動指針〉

- 1 セクシュアル・ハラスメントについて正しく理解する。
- 2 倫理綱領に基づきセクシュアル・ハラスメント防止のための具体的努力を行う。
- 3 問題が生じた場合、速やかに勇気ある厳正な措置をとる。
- 4 問題が生じた場合、当事者以外の構成員は理解を示し協力する。

〈防止体制〉

- 1 ハラスメント防止委員会等を設置し、防止対策と啓蒙活動を全学的に行う。
- 2 ハラスメント相談所を設置して、相談を受け付ける複数の窓口を提供する。
- 3 被害者本位の苦情処理体制を確立する。

上記の防止委員会規則により、東京大学ハラスメント防止委員会（委員長は青山善充副学長）が発足し、平成12年10月31日、学外の専門家2名をふくむ第1回会合が開かれた。早急に議論しなければならない問題は、「セクシュアル・ハラスメント等の防止に関する啓発および研修について」と「セクシュアル・ハラスメント等の相談体制の整備について」である。前者については実態把握のためのアンケート調査、パンフレット、リーフレットやポスターの作成と配布、教職員への研修などが議論された。後者については相談所の設置（現段階では本郷と駒場に相談室を設けること）が決定され、そこに必要な「カウンセリング経験豊富な女性および男性の相談員」を早急に選考することが認められた。第2、3回ハラスメント防止委員会では諸規則（ハラスメント調査委員会、相談所、相談員会議）の整備を行い、現在専門相談員の選考、ポスター、リーフレットの作成、相談室の準備が急ピッチで進んでいる。一昨年のワーキング発足以来、積み重ねてきた議論の成果がまもなくその姿を見せるはずである。

5 図書館の新営

1. 着工に至る経緯

長年の懸案であった教養学部・総合文化研究科の新図書館の建設がいよいよ実現の運びとなった。現在の教養学部図書館は昭和41（1966）年から同44（1969）年にかけて完成した建物で、築後30年を経た現在、その間の学生数の大幅な増加と相俟って老朽化・狭隘化が進み、教養学部のみならず前期課程学生全体の学習施設の問題として、全学的にもその改善が強く求められていた。他方、駒場キャンパスには上記図書館のほか、自然科学図書室、8号館図書室をはじめ各号館の研究室書庫、さらには教官の個人研究室に分散した形で約100万冊の図書資料が収蔵されており、利用に極めて不便であるばかりでなく、これらの収蔵スペースの狭隘化も進んでいる。そしてなによりも、従来型の図書館であるために、新しい時代の要求に充分に対応できなくなっている。これらの問題に対する抜本的な解決策として新図書館の建設が構想され、平成7（1995）年3月の教授会で決定された。爾来、学部図書委員会を中心として構想の具体化が進められ、概算要求項目としてその実現のための努力が続けられてきたが、まことに幸いにも、平成11（1999）年度の補正予算でこの新図書館の建設が認められ、このたび実現の運びとなった。そして平成12（2000）年1月から約半年にわたる検討を経て設計・工事の計画が完了し、同年11月に着工した。竣工は平成14（2002）年3月の予定である。

概算要求した計画ではI期棟1万4000平方メートル、II期棟6000平方メートル、合計2万平方メートルの「駒場図書メディアセンター（仮称）」として構想された。今回実現することになったのはこのうちの約8500平方メートルで、残り約1万2000平方メートルは引き続きII期棟として早期の実現を目指している。その全体が実現したときに、当初構想された「メディアセンター」の全貌が整うことになる。したがって以下の記述では、今回の新営分を「新図書館」ないしは「I期棟」と呼ぶことにする。

2. 新図書館の基本方針

上記のような諸問題を解決するために構想された新図書館は、以下の理念にもとづいている。

1. 劣悪な学習・研究環境の改善

教養学部図書館は主に学部前期課程学生約7000人を対象としているが、閲覧席はわずかにその十分の一強（約900席）に過ぎず、国立大学図書館の基準にも満たない状態である。さらに留学生にとっても学習にいそしむことのできる場所がない。このような深刻な状況を抜本的に改善し、豊かな学習・研究環境を整えることを最重点の目標とする。

2. 分散収蔵から集中・統合へ

駒場キャンパス内の図書を原則として一つの建物に集中し、統一的に配架・管理することを目指す。これによって学部学生のキャンパス全体の図書資料への接近を可能にし、学生用図書の深刻な不足の解消に努める。さらに全学的にも開かれた図書館としてより良い利用者サービスを提供し、共通の資源である図書資料の有効利用を図る。

今回実現することになったI期棟の総床面積は当初の計画の約6割（約8500平方メートル）であり、ここにキャンパス内の全図書資料を集中統合することは不可能である。この究極の目標は今後の課題としてII期棟の実現に待つこととし、今回の新図書館には現在の教養学部図書館と8号館図書室を統合するものとする。

3. 滞在型複合図書館、開放型図書館

滞在型の図書館機能を重視し、書架と閲覧机が並んでいる従来型の機能ばかりでなく、ヒューマンコミュニケーション、リラクセーションの場となるような新しいタイプの複合施設、すなわち「駒場図書メディアセンター（仮称）」のI期棟として位置づける。また個人個人にとっての学習・研究の場であるだけでなく、学生・院生・教官、そして学外の社会人のための「フォーラム」として位置づけ、将来的には、地域コミュニティの文化的中心の一つとなることを視野に入れて検討する。

4. 新時代の資料形態への対応

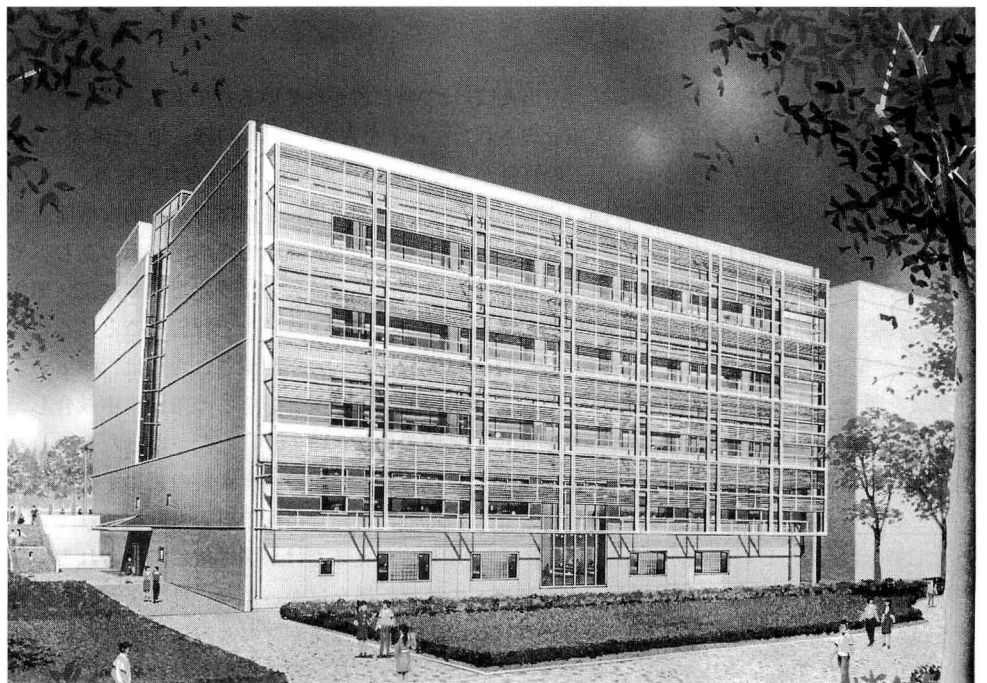
電子図書館の機能を充実させるとともに、ビデオやカセット、さらにはCD-ROMに代表される各種の電子媒体などのニューメディアに対応する設備を設ける。これにより、II期棟の竣工によって完成する図書メディアセンターの全体像を先取りする。

3. 建物の概要

新図書館I期棟は、地上5階、地下1階、総床面積約8500平方メートルの建物である。建設場所は旧第一研究棟の跡地である。教養学部・総合文化研究科はキャンパス全体が木々の緑に囲まれているが、その中でもこの跡地は目の前に矢内原公園を臨む閑静な環境の中に位置し、うってつけの図書館立地といえる。

建物の内部は、収蔵スペースと閲覧スペースの充実はいうまでもなく、新しい時代の図書館に相応しく、ニューメディア対応の設備・機器、情報の発信・受信が可能な環境など、多様な形で次世代型図書館機能の充実が図られている。さらに、人的コミュニケーション・ゆとりの空間などの滞在型図書館としての機能を重視した設計となっている。ラウンジを設けた趣旨もそこにある。そして、車椅子も通れる書架間隔を全館にわたって確保するとともに、対面朗読室、身障者用のトイレを設けるなど、バリアフリー化を目指した建物になっている。

一方、省エネルギー対策、環境対策としては、「光廊下」（建物を横断する吹き抜け）を採用していることも新図書館の建物の大きな特長である。これによって自然対流による換気を促進し、とくに昼間期の熱負荷を低減する。さらに、奥行きが深い建物の中央部に自然光を取り込むことで照明コストの低減をはかる。また南側外壁には自然光を制御するスクリーンを設置し、夏期には遮光することで熱負荷の低減をはかる。



各フロアの構成は次のとおりである。

5階

新図書館にとって最重要課題の一つは前期課程の学生約7000人のための利用環境の整備・充実である。そこで5階にはできるだけ多くの席を用意するとともに、ここを変化に富んだ滞在場所としても位置付け、学習閲覧席約300席を用意し、利用者の多様な要求に応えられる設計とした。そして新刊本、利用頻度の高い本、前期課程の学生の学習に適した図書など約5万8000冊を配架することによって、読書環境の伴った滞在場所としての充実を図った。

4階

4階にも約300席の学習閲覧席を用意した。また5階と同様、新刊本、利用頻度の高い本、前期課程の学生に適した図書など約5万8000冊を配架することによって、図書への利用動線を短くするとともに、図書に囲まれた環境を作って、勉強意欲を触発するように配慮した。

3階

3階は大きく分けて二つの部門から構成されている。一つは参考図書コーナーである。このコーナーには現在の教養学部図書館と8号館図書室に分散して所蔵されている貴重で有用な参考図書約2万冊が一堂に集まるので、他に類をみない参考図書の一大コレクションとなるはずである。また学部内には、人類の文化遺産ともいべき貴重書が、不備な保管状態のままに分散所蔵されている。これらを良好な保存状態の下で管理し、閲覧に供することは文化施設としての図書館の重要な役割である。3階にはそのための貴重書庫を設けるとともに、その閲覧室を隣接させた。

第2はマルチメディア部門である。近年ビデオ、マイクロフィルム、CD-ROM、DVDなど情報媒体は多種多様になってきており、これらの情報媒体をより快適な環境で利用できる場所を用意する必要がある。それがこのコーナーで、マイクロ資料室、AVルーム、BBC・CNNコーナーなどを設置した。またこれに関連して、これからの学習・研究にはパソコンが欠かせない。各自がパソコンを持参して、レポートを作成したり図書館資料を利用することがこれからの趨勢となるはずである。そこで端末持ち込みコーナーに約150席を用意し、さらに情報基盤センターとの連携で情報コンセントを多数設置するなど、ますます増大することが予想されるこの面での利用者の要求に応えられるようにした。(p.25参照)

2階

I期棟の最大の特徴はエントランス（主出入口）が2階に置かれている点である。ブック・デテクション・システム（BDS）で入館管理されたゲートを入ると、地下1階、地上5階がこの2階を中心に上下のフロアに分かれ、上下の移動がスムーズに行えるように造られている。

2階が図書館の中心フロアとして位置していることから、この階にI期棟の基本的な機能を集中するようにした。第1にオンライン検索用端末を約70台配置し、これからの図書館の進むべき姿の一つを提示したことである。現在集中的に進行中の図書廻り及入力が予定どおり竣工・開館時まで完了すれば、新図書館内の約55万冊の検索がすべてオンラインで行えることになる。第2に雑誌架のコーナー。ここに和洋の学術雑誌約500誌の最新号が配架された姿は、幅広い学問領域を誇る駒場の一つの顔となるはずである。第3に事務セクションをこの階に集中統合し、効率的で有機的な管理事務体制とより良いサービスが提供できるようにした。ゆったりとしたエントランスホールを背にして広いカウンターが設けられ、全館の図書資料の貸出手続きはすべてここで行われる。さらに、よりよいサービスのために自動貸出機の導入も計画されている。そして第4はリラクセーションである。学習・研究環境を整えるだけが図書館に求められる機能ではない。学習・研究の疲れを癒し、次の仕事への気分転換をはかったり、対話などで人的交流をはかる場所も必要である。とくに前期課程の学生の場合はキャンパス内にそうした場所があまり用意されていないことから、新図書館の入口を入った左手のラウンジは利用者の足が自

然に向く場所となるはずである。

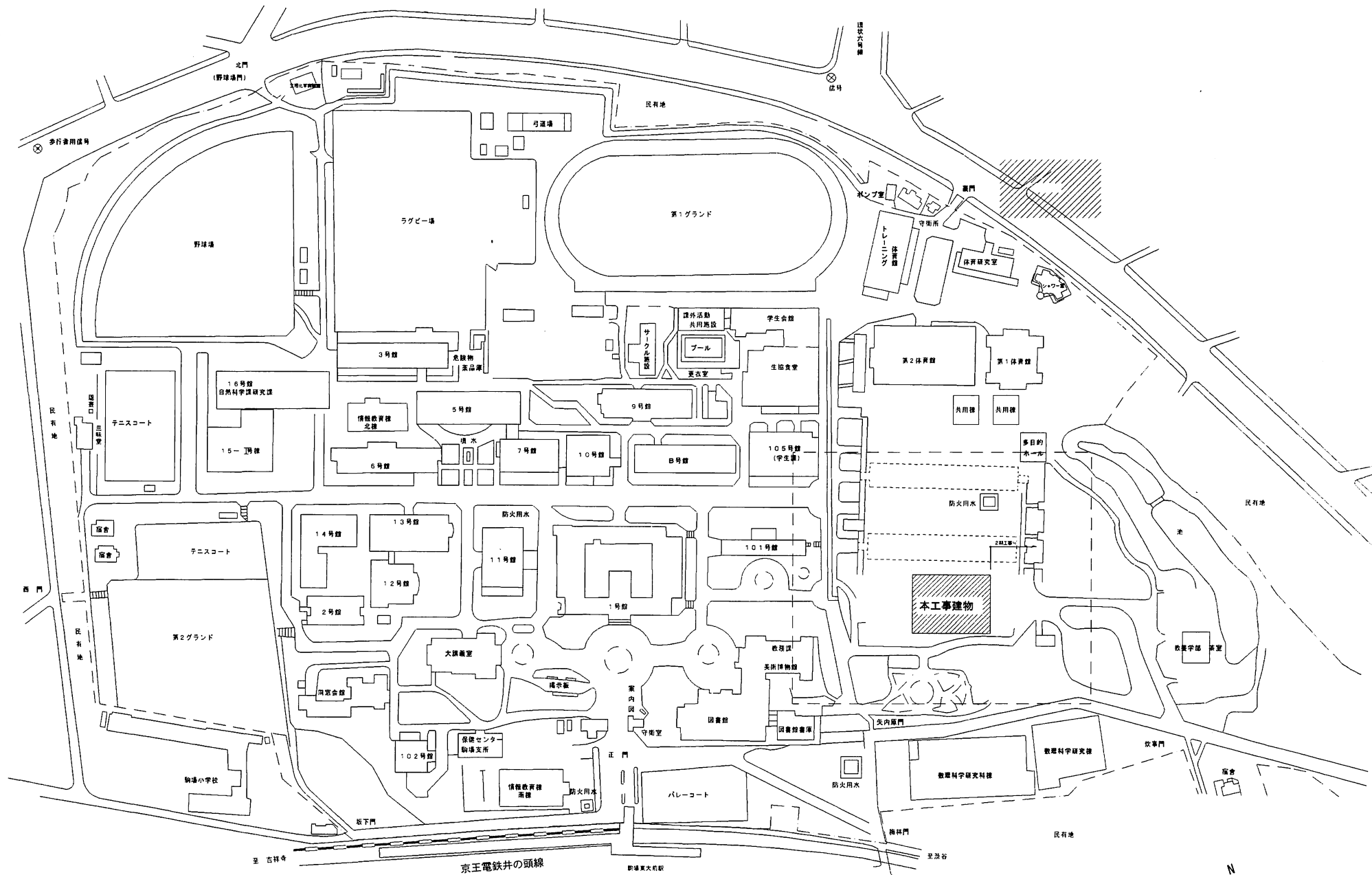
1階

1階と地下1階には、現教養学部図書館と8号館図書室を統合した図書資料のうち、5階・4階および参考図書コーナーに配架したもの以外の大部分が収蔵される。これらが統一した分類請求番号（和書は日本十進分類法、洋書はデューイ十進分類法。この新方式への切り替えのための整備作業が現在進行中である）によって、和書・洋書・雑誌のバックナンバーごとに体系的に配架される。しかし収蔵能力を高めるために書架は集密式とし、約19万冊を収蔵する。そして新図書館の基本的な理念の一つである「全館開架方式」によって、1階・地下1階いずれの図書にも利用者はすべて自由に接架できるという、画期的な利用形態が導入されている。

駒場キャンパスには1300人を越える院生がいるにもかかわらず、キャンパス内での院生の研究環境は決してよくない。また、学部内に分散する図書資料を最終的には新図書館に集中統合する計画であることから、教官などもI期棟を頻繁に利用する状況が生まれるものと推測される。そこで1階に閲覧席約70席を用意し、教官をはじめとする研究者にも利用しやすいよう配慮した。

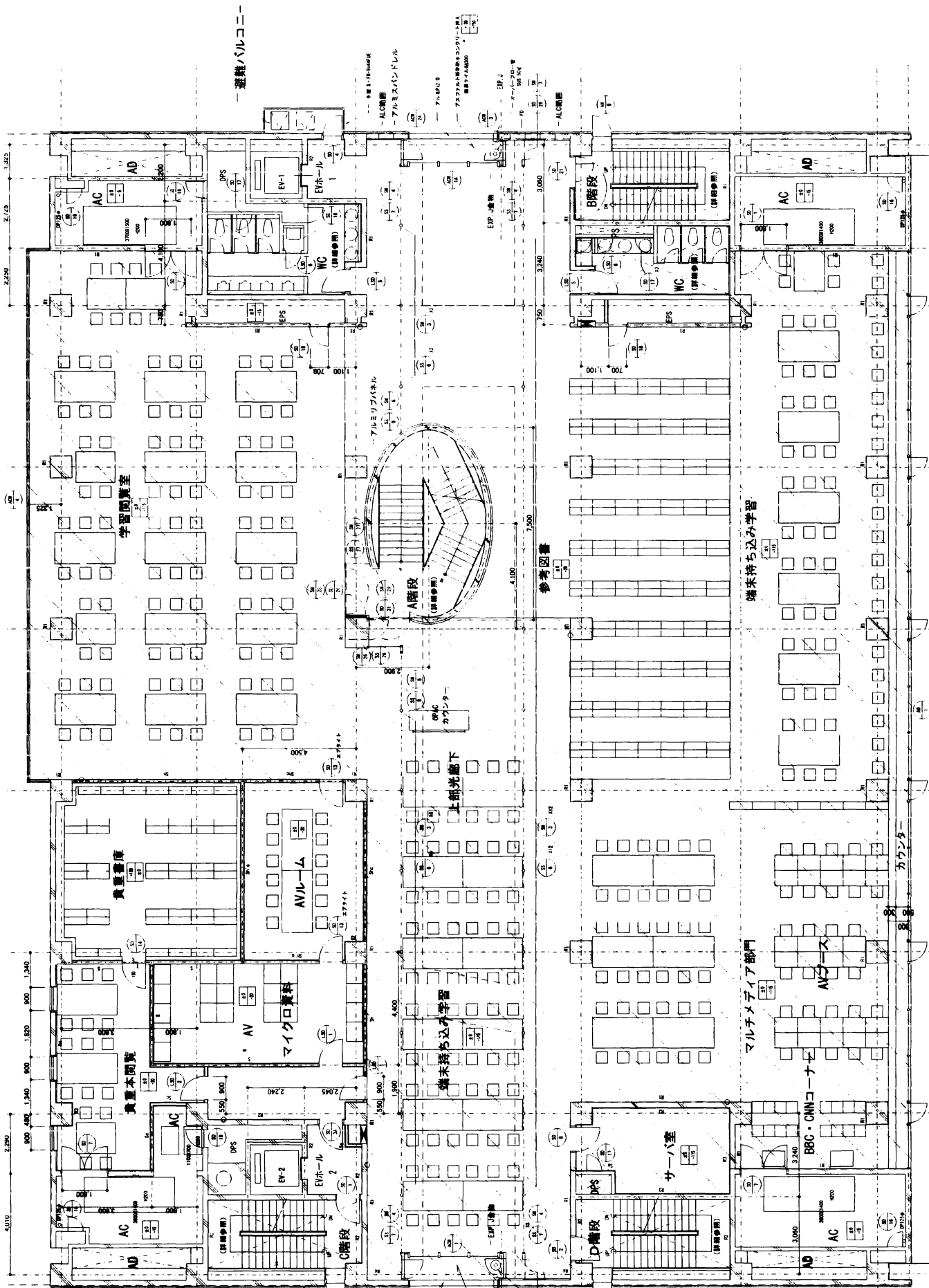
地下1階

この階は書架を中心としたフロアで、収蔵能力を高めるために書架はやはり集密式をとっている。それによって約25万冊を収蔵する。そして1階同様、この階にもキャレルを用意し、研究環境を整えるようにした。



配置図





新図書館3階の概略図 左上に貴重本書庫・閲覧室が配され、残りの大部分は参考図書およびマルチメディア利用、端末持込利用のスペースに当てられる予定。粗い斜線は、電子機器配線のためのフリーアクセス床（2重床）を表す。配線を室内にむき出しにしない構造である。

6 進学振分け方法の改善

平成13年度の進学振分けでは二つの改善が行われた。一つは学事暦が変更され2年生は3学期までの成績を知ってから第一段階の志望変更が可能になったことである。もう一つは進学振分け第二段階で使われる平均点に関して、コア平均点に算入される取得単位数に上限が設けられたことと、新たに履修点（最初はボーナス点と呼んでいた）が採用されたことである。これらの改善に進学情報センターはどのように対応したか。また、学生達の進学動向がどのように変化したかを見ていきたい。

東京大学教養学部

進学情報センターニュース

第27号 (2000. 9)

東京大学教養学部進学情報センター
Academic Guidance Center (AGC)

[illegible]

今年度から3学期の成績を知ってから第一段階の志望変更が可能になりました。進学情報センターでは3学期までの成績に基づいた「各学部・学科・専修・コースごとの志望者の成績分布表」をコンピュータ・システムで検索できるように準備しました。初めてのことで多少の混乱を予想していましたが、混乱はしましたが心配した混乱はなく、多くの皆さんが利用してくれました。8月25日から31日までの志望変更期間中の利用者は約860名でした。9月14日に第一段階内定者と第二段階志望集計が発表になりました。内定しなかった人は自分の成績と志望集計を参考にして自分の能力が生かせる学科・専修・コースを慎重に選んでください。

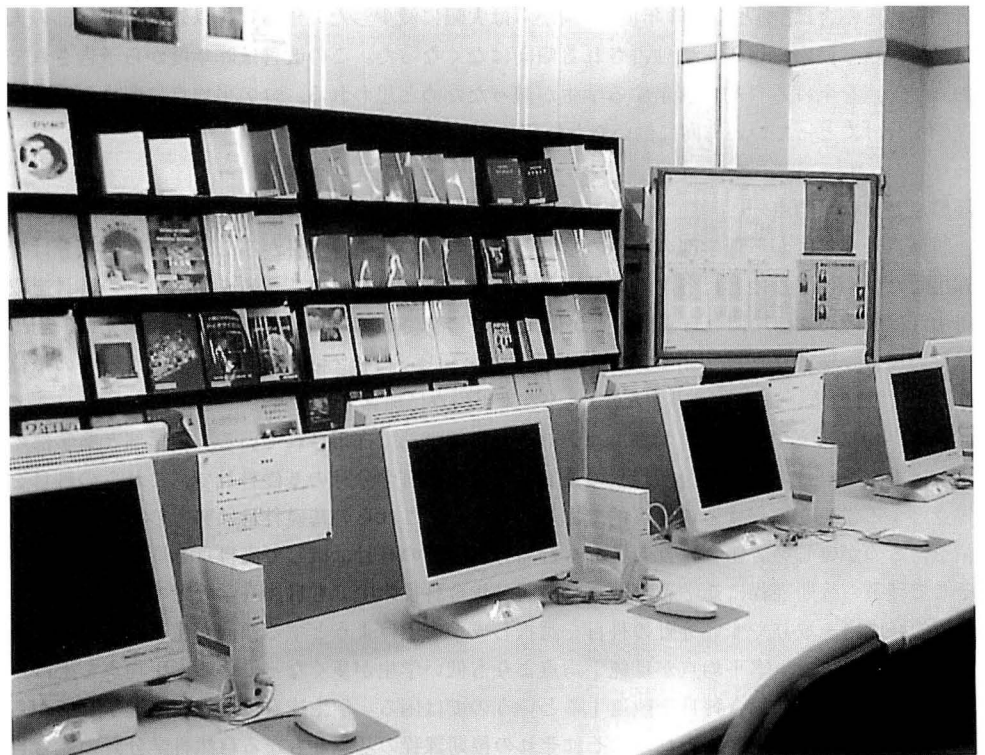
今回の表紙は昭和31年度進学振分けの志望集計表です（「教養学部報」第41号に掲載）。当時の文科1類は現在の文科1・2類に、理科2類は理科2・3類にほぼ対応しています。最近人気のある学科がまだ存在していなかったり、今はもうなくなってしまった学科もあるようです。皆さんが進学を予定している学科の45年前の人気程度はどうか。

学事暦の変更

進学振分けとは「第3学期の終了した時点で、学生の希望と、それまでの学生の学修成績によって、学部・学科等の進学先毎に定められた人数になるよう学生の進学を内定させる手続き」（平成12年度教養学部『履修の手引き』より）である。引用文中にある学修成績とは第3学期までの成績であるが、昨年度までは学事暦の関係で第一段階進学振分けの時点では第2学期までの成績しか知らされない状態で志望届を提出しなくてはならなかった。その為、学生達からは第3学期までの成績を知ってから志望変更届が出せるように改善してほしいとの強い要望が出されていた。

昨年度、教養学部の長年の念願であった講義用教室の冷房設備導入がほぼ完成した。これを受けて学事暦が変更され、学生達の要望にそう為、今年度は3学期の試験を夏期休暇前に実施し、2年生には夏期休暇中の8月25日に3学期までの成績が交付された。この変更により2年生は3学期までの成績を知ってから平成13年度進学振分け「第一段階進学志望変更届」（8月31日締切り）を提出できるようになった。この改善は平成7年度の進学振分けから導入された二段階方式に続くものである。二段階方式は進学振分けの投機性を薄め、少なくとも第一段階では、第二段階でも進学のチャンスがあるので、成績がボーダーラインにある場合でもあまり迷うことなく自分が一番希望する進学先を志望することができるようになった。学生には好評のようである。今回の改善により進学振分け前に自分の学修成績を正確に知り、本当に自分の能力が生かせる学部・学科等をしっかり考えて選択できるようになることが期待されている。

これまでは6月下旬に教務課から発表される「進学振分け第一段階進学志望集計表」と進学情報センターのコンピュータシステムでのみ提供している進学志望者の2学期までの成績に基づく「各学部・学科・専修・コースごとの志望者の成績分布表」が進学先を検討する際の主要な参考資料となっていた。しかし、学生に3学期までの成績を知らせることになるのに対応して、3学期までの成績に基づいた上記「志望者の成績分布表」を新たに準備することが必要になった。これを実現するため、旧式のコンピュータシステム（平成2年度導入）を更新し、端末機を8台から12台に増設した。データ入力もこれまでの手入力にかえ新しく開発したソフトにより教務課のデータベースから直接データを取り込み、成績分布表を作成できるようにした。予想して



いた通り8月25日の成績交付の日から8月31日の志望変更届締切りの日まで夏期休暇中にもかかわらず当センターの利用者は初日が260名それ以降も連日150名程度で大変な混雑であった。しかし幸いなことに学生からの苦情は特に聞かれなかった。当センターでは続いて9月14日の第一段階内定者と第二段階志望集計の発表にあわせて「内定時の成績分布表」とコア平均点、重率平均点、履修点などを加味した「第二段階志望者の成績分布表」を提供した。こちらも9月19日の第二段階志望変更届締切りまでの間に約600名の利用者があった。9月29日に第二段階内定者の発表が、さらに10月6日再志望内定者の発表があり平成13年度の進学振分けは一段落した。

学事暦の変更に伴い当センターには昨年度を上回る大勢の利用者が予想され、実際その通りであったが使い勝手のよいコンピュータシステムを導入したことで心配した混乱はなく、学生達は自分の成績と他の志望者の成績分布を見比べ、十分納得して進学先を選択してくれたものと考えている。

コア平均点と履修点

コア平均点

工学部の全学科・部門ではいろんな学問分野に広く興味を持っている学生を優遇するという趣旨から第二段階ではコア平均点を採用している。この方式は前期課程での取得単位数が多いほど成績が上がる方式である。しかし、この方式に関しては本来の目的からはずれた例も指摘されていた。その一例が昨年度の建築学科に見られる。第二段階で建築学科に内定した学生の大部分は理科1類の学生が通常取得する単位数（60単位程度）の倍程度の単位を取得して高いコア平均点を得ている。これらの学生のほとんどは取得単位数を増やすため前期課程に3年以上在籍している。希望する学科に進学したい意欲は理解できるがその為に在学年限を延長（留年）し、総合科目を取りまくるというのはコア平均点を採用した本来の趣旨とはかけ離れている。そこで今年度からはコア平均点に算入できる単位数に上限が設けられた。上限は88単位で、留年しなくても十分取得可能な数字である。

その結果、第二段階の工学部志望者全体の中でコア平均点が100点を超える学生が昨年度は20名近くいたのに対し今年度は1名と激減した。それでもコア平均点が単純平均点より20点近く上昇する学生もかなり存在している。今年度の建築学科第二段階を見てみると内定者の中で留年者が占める割合は3割となり昨年度の8割からは大幅に減少した。建築学科以外でも工学部の人気学科が第二段階で留年生に独占される傾向はなくなった。この改善は昨年度から予告されており平均点を上げる目的で留年する学生が減ったためと思われる。コア平均点に関する改善は進学振分けにとっていい方向に働いたといえる。

履修点と重率平均点

履修点は今年度から理学部の多くの学科と教養学部の基礎科学科が第二段階の進学振分けで採用した。その主な内容は各学科の専門基礎ともなる科目を学科ごとに指定し、その科目を取得すれば成績の如何に関わらず平均点が最大2点プラスされるという制度である。例えば、物理学科の場合、理科1類の学生が総合科目の「熱力学」と「振動・波動論」のいずれか一方の単位を取得すれば1点、両方を取得すれば2点が重率平均点に加算される。

重率平均点は文学部、教育学部、理学部それに薬学部で採用されている。理学部と薬学部の場合、重率を掛ける科目は後期課程の基礎となる自然科学分野の基礎科目で、これらの科目を得意とする学生を優遇するのが目的である。しかし、これらの基礎科目は努力の割には高い成績を得るのが難しい。総合科目の場合も自然科学分野の科目は概して高得点を取るのが難しい。そこで理系の後期課程に進学志望の学生の間で総合科目の中でも自然科学分野の科目を敬遠し比較的好成績を取りやすい分野の科目を選択し成績を上げようとする傾向が生まれている。その結果、理系では重率平均点が単純平均点よりも低い学生が多くなっている。平均点を上げるために自然科学系の総合科目を敬遠するというのでは困る。学生達も後期課程へ進学してから学修に支障をきたすと思われる。それぞれの後期課程の基礎ともなる自然科学分野の総合科



目を積極的に履修してくれることを期待して履修点が導入されたわけである。

履修点の採用により今年度の第二段階がどのように変化したか。理科1類からの人気学科物理学科と理科2類からの人気学科生物化学科を例に取り見てみたい。物理学科の場合、昨年度は第二段階内定者23名中重率平均点が単純平均点を上回った学生はわずか6名であった。今年度重率平均点に履修点を加算した平均点を用いたところ内定者27名中25名が単純平均点を上回った。この結果は今年度の物理学科進学内定者の大部分が履修点の対象となっている「熱力学」と「振動・波動論」の単位を取っていることを示している。生物化学科の場合、昨年度は内定者中重率平均点が単純平均点を上回ったのは7名中2名、履修点を加算した今年度は8名中7名と物理学科と同様の傾向を示した。生物化学科で履修点の対象となっているのは「数理科学」、「熱力学」、「物質科学」、「動物科学」等の総合科目である。学生一人一人の履修内容の変化までは分析していないが、履修点を採用したことで多くの学生がその対象となる総合科目の単位を取得したことは明かである。この改善もそのもくろみに沿った結果を得たといえる。

進学動向

今年度から導入された進学振分けに関する二つの改善とそれに対応した学生達の進学動向を見てきたが、おおむね改善により期待されている方向に向かっているように思われる。学生達は第一段階では進学内定の可能性が低い場合でも自分が一番希望している学部・学科等を志望し、残念ながら内定しなかった場合は第二段階で改めて慎重に進学先を考慮しているようである。その際、今年度更新されたコンピュータシステムで提供している進学情報に関する各種データが重要な参考資料となっている。進学情報に関するデータからは次のようなことも読みとれる。進学先にはいわゆる人気学科と学科の定員が埋まらない不人気学科があるが、不人気学科に進学が内定した学生達の成績分布を見てみると上位の学生達の成績は希望すればどの学科にも進学可能なものである。人気不人気にとらわれず自分の進学したい学科を決めている学生が少なくないことが判り安心する。

進学情報センターに相談に訪れる学生の中には成績にとらわれすぎるなど問題のあるケースもあるが、今年度の改善も含めて大筋では進学振分け制度は教養学部のリベラル・アーツ教育の理念を生かしながらかなりよく機能しているといえる。

付属資料1

2000(平成12)年度授業日程表

4月10日(月)～7月18日(火)	第1・3学期授業
7月19日(水)～7月31日(月)	第1・3学期試験前半(総合科目、方法論基礎等)
8月1日(火)～8月31日(木)	夏季休業
9月1日(金)～9月5日(火)	第1・3学期試験後半
9月6日(水)～10月9日(月)	秋季休業
10月10日(火)～12月25日(月)	第2・4学期授業前半
12月26日(火)～平成13年1月8日(月)	冬季休業
1月9日(火)～1月31日(水)	第2・4学期授業後半
2月1日(木)～2月15日(木)	第2・4学期試験

教養学部の授業時間

1時限	9時00分～10時30分
2時限	10時40分～12時10分
3時限	13時00分～14時30分
4時限	14時40分～16時10分
5時限	16時20分～17時50分

2000(平成12)年度志願,合格,入学状況

教養学部前期課程

科 類	志願者	受験者	合格者	入学者	定員外		入学者総数
					特選第1種	国費	
文科一類	1,660	1,629	551	551	1	3	615
	1,119	299	61	60			
二類	1,174	982	333	333	3	4(1)	379
	678	184	39	39			
三類	1,456	1,329	447	446	2	6	508
	903	268	54	54			
理科一類	2,973	2,563	1,033	1,026	5	18(1)	1,169
	2,409	554	125	120			
二類	2,051	1,710	499	496	1	1	558
	691	265	62	60			
三類	419	323	81	81	0	0	91
	178	47	10	10			
計	9,733	8,536	2,944	2,933	12	32(2)	3,320
	5,978	1,617	351	343			

上段は前期日程試験,下段は後期日程試験を示す。定員外・国費欄の()内は外国政府派遣留学生を内数で示す。

教養学部後期課程

学 科	平成12年度進学者	学士入学者
超域文化科学科	24	1
地域文化研究学科	37	1
総合社会科学科	39	
基礎科学科	46	
広域科学科	20	
生命・認知科学科	22	
計	188	2

大学院総合文化研究科

専 攻	修士課程			博士課程		
	志願者	合格者	入学者	志願者	合格者	入学者
言語情報科学	105	31	31	81	27	27
超域文化科学	181	35	35	68	30	30
地域文化研究	164	36	35	67	33	33
国際社会科学	187	33	32	71		23
広域科学	278	119	102	81	68	66
(生命環境科学系)	(120)	(42)	(37)	(34)	29	28
(広域システム科学系)	(57)	(32)	(27)	(23)	21	21
(関連基礎科学系)	(101)	(45)	(38)	(24)	18	17
計	915	254	235	368	181	179

()内は専攻内の系の数字を示す。

2001(平成13)年度進学内定者数

2000(平成12)年10月30日
上段：第一段階 下段：第二段階

学 部 学 科	定数	内 定 者 数							再 志 望			合 計
		文一	文二	文三	理一	理二	理三	小 計	文三	理一	理二	
法	605	604 2	2	5	4	2		617 2				619
医 学	100				1	10	93	104				104
健康科学 ・看護学	40			5	1	16		22 14			8	44
工	985	1		4	672 273	48		725 273		7		1,005
文	416	1	13 2	280 80	3 5	3 7		300 94	1			395
理	322				167 88	61 34		228 122		1	4	355
農	295	1	2	5 4	32 10	163 99		203 113		1	8	325
経済	365		343 13	5	5	2		355 13				368
教養	203	13 4	15 3	47 19	44 12	22 17		141 55				196
教育	88		1	54 23	5 1	3 4		63 28				91
薬	80				14 9	42 18		56 27				83
計	3,499	626 6	376 18	405 126	948 398	372 193	93	2,814 741	3,555	1	9 20	3,585

科類別最終内定者数	626	394	532	1,355	585	93
-----------	-----	-----	-----	-------	-----	----

備 考 … 本表には下記の外国人留学生が含まれており、いずれも第一段階で内定している。

	外国学校卒業生特別選考第1種	日本政府(文部省)奨学金留学生	外国政府派遣留学生
法学部	1		
工学部	8	16	3
文学部	1		
理学部		3	
農学部	1		
経済学部	5	3	1
教養学部	2	2	

定員の推移 1995(平成7)年度～2000(平成12)年度

教養学部前期課程募集人員

科 類	平成7年 1995年		平成8年 1996年		平成9年 1997年		平成10年 1998年		平成11年 1999年		平成12年 2000年	
文科一類	675		655		645		615		605		605	
文科二類	405		395		385		375		365		365	
文科三類	500		500		500		500		500		495	
理科一類	1,295		1,295		1,295		1,276		1,236		1,147	
理科二類	561		561		561		560		557		551	
理科三類	90		90		90		90		90		90	
計	1,580	1,946	1,550	1,946	1,530	1,946	1,490	1,926	1,470	1,883	1,465	1,788
	3,526		3,496		3,476		3,416		3,353		3,253	

教養学部後期課程進学定員①

学 科	平成7年 1995年
教養学科第一	30
教養学科第二	45
教養学科第三	10
基礎科学科第一	60
基礎科学科第二	15
計	160

教養学部後期課程進学定員②

学 科	平成8年 1996年	平成9年 1997年	平成10年 1998年	平成11年 1999年	平成12年 2000年
超域文化科学科	20	20	20	20	20
地域文化研究学科	35	35	35	35	35
総合社会科学科	15	15	15	15	15
基礎科学科	50	45	45	45	45
広域科学科	20	25	25	25	25
生命・認知科学科	20	20	20	20	20
計	160	160	160	160	160

*平成8年度より、教養学科第一、教養学科第二、教養学科第三、基礎科学科第一及び基礎科学科第二の5学科は、超域文化科学科、地域文化研究学科、総合社会科学科、基礎科学科、広域科学科及び生命・認知科学科の6学科へ改組。

大学院総合文化研究科受入定員

専 攻	平成7年 1995年		平成8年 1996年		平成9年 1997年		平成10年 1998年		平成11年 1999年		平成12年 2000年	
	修士	博士	修士	博士	修士	博士	修士	博士	修士	博士	修士	博士
比較文学比較文化	3	3										
表象文化論	6	3										
言語情報科学	30	24	30	24	30	24	30	24	30	24	30	24
超域文化科学*			41	29	41	29	41	29	41	29	41	29
地域文化研究	12	6	43	27	43	27	43	27	43	27	43	27
国際社会科学*			34	23	34	23	34	23	34	23	34	23
国際関係論	7	4										
相関社会科学	7	3										
文化人類学	6	4										
広域科学**	100	61	100	61	100	61	100	61	100	61	100	61
(生命環境科学系)	(38)	(23)	(38)	(23)	(38)	(23)	(38)	(23)	(38)	(23)	(38)	(23)
(広域システム科学系)	(25)	(15)	(25)	(15)	(25)	(15)	(25)	(15)	(25)	(15)	(25)	(15)
(相関基礎科学系)	(37)	(23)	(37)	(23)	(37)	(23)	(37)	(23)	(37)	(23)	(37)	(23)
計	171	108	248	164	248	164	248	164	248	164	248	164
	279		412		412		412		412		412	

*平成8年度より、比較文学比較文化、表象文化論及び文化人類学の3専攻は超域文化科学専攻へ改組。

また、国際関係論、相関社会科学の2専攻は国際社会科学専攻へ改組。

*広域科学専攻は平成6年度より3系からなる専攻に拡充改組された。各系の定員数は目安である。

2000(平成12)年度クラス編成表（1年）

(平成12年5月1日現在)

	文科一類		文科二類		計
	入学	留年	入学	留年	
1 A	3				3
2 C	4		3		7
4 F	28		26		54
5 F	28		26		54
6 F	28		26	1	55
7 F	27		27		54
8 F	28		25		53
9 G	12		8		20
10H	33		25		58
11H	33	1	25		59
12H	16		14		30
13 I	9		3		12
14 B	32		13		45
15 B	31	1	14		46
16 B	31		14		45
17 B	31		13		44
18 B	31		13		44
19 D	30	2	15		47
20 D	30		15		45
21 D	31		14		45
22 D	30		15		45
23 D	30		15		45
24 D	30		15		45
25 D	29		15		44

(合計999)

	文科三類		計
	入学	留年	
2 C	2		2
4 F	49		49
5 F	49	2	51
6 F	24		24
7 G	11		11
8 H	56	1	57
9 I	8		8
10B	45	1	46
11B	45	2	47
12B	22		22
13D	50	1	51
14D	49		49
15D	49	2	51
16D	49	1	50

(合計518)

A：ドイツ語既修クラス
B：ドイツ語初修クラス
C：フランス語既修クラス
D：フランス語初修クラス
E：中国語既修クラス

F：中国語初修クラス
G：ロシア語初修クラス
H：スペイン語初修クラス
I：朝鮮語初修クラス

	理科一類		計
	入学	留年	
1 A	2		2
3 E	1		1
4 F	46	3	49
5 F	46	3	49
6 F	46	1	47
7 F	46	2	48
8 F	46		46
9 G	24	1	25
10H	59	1	60
11H	57	1	58
12B	49	1	50
13B	49	1	50
14 B	48	1	49
15 B	48	1	49
16 B	47		47
17 B	48	3	51
18 B	48		48
19 B	48		48
20 B	48	2	50
21 B	46		46
22 B	46	5	51
23 D	46		46
24 D	46	1	47
25 D	45	2	47
26 D	44	2	46
27 D	45	3	48
28 D	45	5	50

(合計1,208)

	理科二類		理科三類		計
	入学	留年	入学	留年	
2 C	1				1
4 F	59	1	5		65
5 F	58	1	5		64
6 G	5				5
7 H	49	4	4		57
8 H	24		3		27
9 B	41	3	10		54
10B	42	1	9		52
11B	42	4	9		55
12B	42	1	9		52
13B	42		9		51
14 B	40	2	9		51
15 D	38	1	7		46
16 D	38	4	6		48
17 D	37		6		43

(合計671)

総計3,396名

2000(平成12)年度クラス編成表（２年）

(平成12年５月１日現在)

	文科一類		文科二類		計
	進級	留年	進級	留年	
1 A	1				1
2 C	3				3
3 E	1				1
4 F	24	3	14	5	46
5 F	24		14	6	44
6 F	25	5	13	2	45
7 F	24		14	1	39
8 F	23		14	1	38
9 F	23	2	15	2	42
10G	7	1	6		14
11H	31		31	1	63
12H	32	1	30	2	65
13 I	20	1	3	1	25
14B	29	1	19		49
15B	28	1	19		48
16B	28	1	20	2	51
17B	28	3	20	3	54
18B	28	4	20	4	56
19D	33	1	17	2	53
20D	34	1	17	1	53
21 D	33	3	18	4	58
22D	33	4	18	2	57
23D	33	2	18	4	57
24D	33	1	18	4	56
25D	34		17		51

(合計1,069)

	文科三類		計
	進級	留年	
2 C	7		7
4 F	41	3	44
5 F	39	4	43
6 F	41	4	45
7 G	8	4	12
8 H	41	9	50
9 I	11	1	12
10B	44	5	49
11B	40	6	46
12B	22	4	26
13D	61	12	73
14D	61	3	64
15D	58	6	64
16D	30	4	34

(合計569)

- A：ドイツ語既修クラス
B：ドイツ語初修クラス
C：フランス語既修クラス
D：フランス語初修クラス
E：中国語既修クラス
- F：中国語初修クラス
G：ロシア語初修クラス
H：スペイン語初修クラス
I：朝鮮語初修クラス

	理科一類		計
	進級	留年	
1 A	3		3
2 C	1		1
3 E	2		2
4 F	47	7	54
5 F	47	12	59
6 F	48	11	59
7 F	48	4	52
8 F	49	13	62
9 G	24	1	25
10H	51	11	62
11H	49	13	62
12B	45	7	52
13B	46	12	58
14B	47	6	53
15B	46	9	55
16B	47	15	62
17B	44	7	51
18B	46	8	54
19B	47	5	52
20B	45	8	53
21 B	47	6	53
22B	45	5	50
23B	44	7	51
24D	53	16	69
25D	52	7	59
26D	52	10	62
27D	50	15	65
28D	50	19	69
29D	52	9	61

(合計1,470)

	理科二類		理科三類		計
	進級	留年	進級	留年	
1 A			1		1
2 C	4				4
4 F	52	12	3		67
5 F	51	4	3		58
6 G	10	3	1		14
7 H	61	13	8		82
8 B	36	3	7		46
9 B	34	4	7		45
1 0 B	37	8	7		52
1 1 B	34	9	7	2	52
1 2 B	35	9	8		52
1 3 B	34	9	8		51
1 4 B	35	5	8	1	49
1 5 D	49	7	9	1	66
1 6 D	46	9	10		65
1 7 D	25	8	4		37

(合計741)

総計3,849名

研究生

総合文化研究科大学院研究生，外国人研究生数

(平成12年11月1日現在)

専 攻	大学院研究生	外国人研究生	計
言語情報科学	1	17	18
超域文化科学	2	26	28
地域文化研究	9	13	22
国際社会科学	2	8	10
広域科学	15	7	22
計	29	71	100

大学院研究生の出願資格は、総合文化研究科修士課程修了，博士後期課程修了，同課程満期退学又は同程度の学力を有する者。
外国人研究生の出願資格は、外国籍を有し，大学を卒業又は外国において，学校教育における16年の課程を修了した者。

教養学部研究生数

(平成12年10月1日現在)

後期課程	11	(このうち外国人2①)	○は在日韓国人内数
------	----	-------------	-----------

研究生の出願資格は，4年制大学卒業又は同程度の学力を有する者。
(前期課程には，学部研究生制度がない。)

留学生

数字はすべて2000年11月1日現在

	学部前期 課程学生	学部後期 課程学生	大学院学生		学部 研究生	短期 交換 留学生	大学院 外国人 研究生	大学院 研究生	計
			修士	博士					
バングラデシュ	2						1		3
スリランカ							1		1
ミャンマー	1		1						2
タイ	6			1				1	8
マレーシア	5					2			7
シンガポール	9		1						10
インドネシア	9			1		1			11
フィリピン	1			1		1			3
香港	2		1	2			1		6
大韓民国	1	1	22	52	1	1	17	3	98
モンゴル	4								4
ベトナム	11			1					12
中国・台湾	27・1		14・6	39・17		3・0	13・6	0・1	96・31
カンボジア	1								1
イラン	1								1
トルコ	1		1						2
エジプト				2					2
ナイジェリア	1								1
モロッコ	1								1
オーストラリア	2			1		3	1		7
ニュージーランド			1			2	2		5
カナダ	1			2			1		4
アメリカ合衆国			1	5		5	9	1	21
メキシコ	1								1
ブラジル			1	1			1		3
パラグアイ	1								1
アルゼンチン			1						1
チリ						2			2
ペルー				1					1
スウェーデン				1					1
ノルウェー							1		1
イギリス						2	2		4
ドイツ				1		1	2		4
フランス						1	4		5
スペイン							2		2
ポルトガル	1						1		2
イタリア			1	1			1		3
オーストリア							1		1
ポーランド			1	1					2
ハンガリー	3	1							4
ブルガリア	1			2		1			4
ロシア			1				3		4
ウクライナ			1						1
ユーゴスラビア			1						1
ルーマニア	1								1
アゼルバイジャン							1		1
計	95	2	55	132	1	25	71	6	387

付属資料2

シンポジウム

タイトル／使用言語	会場／期日	主なパネリスト	主催者	その他
教養学部創立50周年記念シンポジウム —21世紀の大学像を求めて— 日本語	教養学部900番教室 2000.11.11	第一部 岡本和夫（東京大学数理科学研究科長） 永山國昭（岡崎国立共同研究機構） 西垣 通（東京大学情報学環教授） 長谷川真理子（早稲田大学政経学部教授） 第二部 小和田恒（日本国際問題研究所理事長） 小城佳子（東京大学教養学部教授） 寺島実郎（三井物産戦略研究所所長） 遠山敦子（国立西洋美術館館長）	教養学部	
人間と生命倫理」・「社会の変容と大学	教養学部視聴覚ホール 2000.4.26,27	甲斐一郎（医学部教授，健康学習・教育学）石川正俊（工学部教授，計数工学）竹内整一（文学部教授，倫理学）塩川光一郎（理学部教授，分子発生学）林良博（農学部教授，獣医解剖学）浅島誠（教養学部教授，生命環境科学）武藤芳照（教育学部教授，身体教育学）武藤誠（薬学部教授，遺伝学）江頭憲治郎（法学部教授，企業法）小宮山宏（工学部教授，化学システム工学）生源寺眞一（農学部教授，食料・資源経済学）堀内昭義（経済学部教授，金融論）丹羽清（教養学部教授，広域システム科学）金子元久（教育学部教授，比較教育社会学）	進学情報センター	
〈資本〉から人間の経済へ	教養学部13号館1323教室 2000.6.10	金子郁容（慶應義塾大学教授，大学院政策・メディア研究科）西嶋公子（在宅看護支援センター鳴瀬・西嶋医院）丸山真人（国際社会科学専攻）	総合社会科学科	
文学と翻訳	教養学部視聴覚ホール 2000.06.28	柴田元幸（東京大学文学部助教授，翻訳家），堀江敏幸（明治大学助教授，作家）フェイ・クリーマン（コロラド大学助教授）	言語情報科学専攻	
欧州統合と21世紀の東アジア —未来への提言—	教養学部13号館1313教室 2000.10.28	神余隆博（外務省審議官，地域文化研究専攻客員教授）木畑洋一（国際社会科学専攻）山影進（国際社会科学専攻）木宮正史（地域文化研究専攻）森井裕一（地域文化研究専攻）	地域文化研究専攻	ドイツ・ヨーロッパ研究室との共催

タイトル／使用言語	会場／期日	主なパネリスト	主催者	その他
フロベール・シンポジウム「書くことの旅と誘惑」	数理科学研究棟1階会議室 2000.11.24	菅谷憲興（立教大学）工藤庸子（地域文化研究専攻）小倉孝誠（東京都立大学）柏木加代子（京都市立芸術大学）松澤和宏（名古屋大学）金谷銀（江原大学）ジャック・ネーフ（パリ第8大学）蓮實重彦（総長）	フランス語部会	ドイツ・ヨーロッパ研究室，パリ第8大学との共催
酸素を発生する光合成生物の誕生と発展－不連続による飛躍	教養学部視聴覚ホール 2000.10.5,6	高宮建一郎（東工大・生命理工・教授）野口巧（理研・生体物理化学・研究員）榎並勲（東京理科大・理・教授）村上明男（神戸大・内海城センター・助教授）小川晃男（名大・カ物分子応答研究センター・教授）太田にじ（埼玉大・理・助手）池内昌彦（総合文化研究科・助教授）金子貴一（かずさDNA研究所・研究員）伊藤繁（名大・物理・教授）松浦克美（東京都立大・理・生物・助教授）田中歩（北大・低温研・教授）永島賢治（東京都立大・理・生物・助手）加藤泰浩（工学系・地球システム工学・助教授）川井浩史（神戸大・内海城センター・教授）平石明（豊橋科学技術大・教授）嶋田敬三（東京都立大・理・生物・教授）井上和仁（神奈川大・理・助教授）大岡宏造（阪大・理・助手）宮下英明（東京農工大・工・助手）三室守（山口大・理・自然情報科学・教授）中山剛（筑波大・生物科学系・助手）河野重行（新領域・先端生命・教授）小保方潤一（名大・遺伝子実験施設・助教授）	生命環境系助教授 池内昌彦	
21世紀における理科教育の課題」	教養学部13号館1323教室 2000.9.23	神田亮二（都立牛込商業高等学校生物教諭）野々村禎昭（東京大学名誉教授）林 衛（岩波書店「科学」編集者）小泉英明（日立基礎研究所所長）村松正実（東京大学名誉教授、埼玉医科大学将来研究部門教授）	東京大学教養学部生物部会	「大学の生物学教育を考える会」，（社）日本動物学会との共催
マイクロスケールケミストリー－研究と教育）	教養学部広域科学科会議室 2000.11.8	森武彦（東京大学教授）荻野和子（東北大学教授）	教養学部化学部会	
第8回身体運動科学シンポジウム	13号館1313教室 2000.6.10	山田茂（生命環境科学系）福永哲夫（生命環境科学系）石井直方（生命環境科学系）小林寛道（生命環境科学系）	生命環境科学系身体運動科学部会	

講演会

講師	所属機関／職	タイトル／使用言語	会場／期日	主催者
安藤忠雄	東京大学工学系研究科教授	教養学部創立50周年記念連続講演会 「学び、知を超えて」 Vol.1 建築 安藤忠雄「旅に学ぶ」 日本語	教養学部視聴覚ホール 2000.5.30	教養学部
鈴木忠志	静岡県舞台芸術センター 芸術総監督	教養学部創立50周年記念連続講演会 「学び、知を超えて」 Vol.2 演劇・身体の学び 日本語	教養学部視聴覚ホール 2000.10.23	教養学部
利根川 進	マサチューセッツ工科大学教授	学生諸君に期待するもの ―主として学部学生のために― 日本語	数理科学研究科大講義 室 2000.12.6	東京大学
アレクセイ・コメチ	ロシア文化省芸術研究所長	ロシアの教会建築―時代と地域の特質	教養学部視聴覚ホール 2000.11.7	地域文化研究専攻ロシア・東欧分科
Suzan Rose-Ackerman	Yale University, Professor	Corruption and Government: Causes, Consequences and Reform	教養学部2号館306号室 2000.7.17	国際社会科学専攻
高野紀元	国際社会科学専攻, 客員教授	最近の国際情勢: 特に朝鮮半島を巡って	教養学部2号館306号室 2000.7.17	国際社会科学専攻
Morten Bergsmo	International Criminal Tribunal for the Former Yugoslavia (ICTY), Legal Advisor	Between Legitimacy and Efficacy: the Prospects for International Criminal Justice	教養学部2号館306号室 2000.12.19	国際社会科学専攻
Yukiko Takashiba	ICTY, Legal Officer	Overview of the ICTY and the Recent Devel- opments in Its Jurisprudence	教養学部2号館306号室 2000.12.19	国際社会科学専攻
Crawford Young	University of Wisconsin Madison, Professo	Democracy and Civil Conflict in Africa	教養学部2号館306号室 2000.12.19	国際社会科学専攻
Neil Thomas	University of Birmingham	Flagellar Waves and Oscillating Molecular Motors. (英語)	教養学部3号館207/209 号室 2000.2.22	教養学部
谷 知己	東京都臨床医学総合研究所	周期的に張力を変動させる細胞膜―ゾウリ ムシ収縮胞膜の生理学的研究	教養学部3号館207/209 号室 2000.4.12	教養学部
Win Sale	Emory University School of Medicine	Molecular characterization of flagellar radial spokes: identification of calmodulin and an Akinase anchor protein in the structure of the spoke stalk. (英語)	教養学部3号館207/209 号室 2000.11.11	教養学部

講師	所属機関／職	タイトル／使用言語	会場／期日	主催者
Gregory J. Pazour	University of Massachusetts Medical School	LC2, the Chlamydomonas homologue of the t complex-encoded protein Tctex2, is essential for outer dynein arm assembly. (英語)	教養学部3号館207/209号室, 2000.11.11	教養学部
Matthias Roegner	Ruhr-Universitaet Bochum Professor	Studies on cyanobacterial photosynthetic membrane proteins : Isolation-crystallization-biotechnology」 (英語)	教養学部15号館311 2000.5.24	生命環境系・池内昌彦・大森正之
下河原浩介	帝京大学・助手	緑藻クラミドモナスのリン酸欠順化機構の分子的解明	教養学部3号館209室 2000.2.10	生命環境系教授・大森正之

公演・演奏会

会の名称	出演者	主な内容	会場／期日	主催者
第88回オルガン演奏会「ジ ャネット&コリン オルガ ンデュオ」	ジャネット・フィシェル、コリン・アンドリュウズ (オルガン)	バッハ：ブランデンブルグ協奏曲第3番、 パッサカリア ハ短調、前奏曲とフーガ ニ短調 シューマン：「バッハの名による6つのフー ガ」ほか	900番教室 2000.5.11	オルガン委員会
第89回オルガン演奏会「ジ ェニファー・ベイト オル ガン演奏会」	ジェニファー・ベイト (オルガン)	ベイト：グレゴリオの主題による変奏曲、 ディキンソン：パラフレーズ第1番、バッ ハ：前奏曲とフーガ ニ短調ほか	900番教室 2000.5.29	オルガン委員会
第90回オルガン演奏会「オ ルガンと声楽の夕べ バッ ハ没後250年を記念して」	植木紀夫 (オルガン) 若槻量子 (ソプラノ) バッ ハ・アンサンブルコール (合唱)	ブクステフーデ：トッカータ ニ短調、バ ッハ：前奏曲とフーガ ハ短調、マタイ受 難曲抜粋 ほか	900番教室 2000.11.9	オルガン委員会

学外からの評価

受賞など

総合文化研究科

氏名	賞の名称	年月日
浅島 誠	第31回内藤記念科学振興賞（内藤記念科学振興財団）	2000.3.17
松浦 寿輝	第50回芸術選奨文部大臣賞（文化庁）	2000.3.23
松村 剛	ランティエ賞（フランス学士院）	2000.5.19
金沢 英之	第17回上代文学会賞（上代文学会）	2000.5.27
松浦 寿輝	第123回芥川賞（日本文学振興会）	2000.8.22
安田 賢二	論文賞（応用物理学会）	2000.9.4
松本 忠夫	論文賞（Zoological Science）	2000.9.22
久保 啓太郎	日本バイオメカニクス学会奨励賞	2000.10.8
久保 啓太郎	バイオメカニズム学会奨励賞	2000.11.24
望月 聡	第3回長谷川賞（日本失語症学会）	2000.10.11
浅島 誠	有馬啓バイオインダストリー協会賞（バイオインダストリー協会）	2000.10.26

2000(平成12)年度 科学研究費補助金

平成12年12月8日現在

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
1	COE形成基礎	金子 邦彦	教授	複雑系としての生命システムの解析	270,000
2	創成の基礎	小牧 研一郎	教授	反陽子を用いた反物質科学	200,000
3	特別推進	鹿兒島 誠一	教授	有機導体の柔らかい格子における電子状態：物性制御から設計へ	24,000
4	特定領域A	浅島 誠	教授	脊椎動物のボディープランの分子の基盤（総括班）	32,000
5	特定領域A	浅島 誠	教授	脊椎動物のボディープランの分子の基盤（計画班）	50,100
6	特定領域A	須藤 和夫	教授	生物分子モーターの多様性と同一性：総括班	43,400
7	特定領域A	須藤 和夫	教授	生物分子モーターの動的構造解析	34,800
8	特定領域A	小林 啓二	教授	特異なスピン共役系の開発と展開	35,000
9	特定領域A	大貫 隆	教授	「悪霊」表象から見た古代地中海世界の社会史	800
10	特定領域A	高塚 和夫	教授	分子のダイナミクスとカオス	16,000
11	特定領域A	永田 敬	教授	原子・分子の集合化による構造修飾と反応制御	4,000
12	特定領域A	跡見 順子	教授	筋細胞における細胞骨格分子シンクロナイズーションによる張力機能発現連関	2,000
13	特定領域A	小倉 尚志	助教授	結晶構造をもとにしたチトクロム酸化酵素の共鳴ラマン分光学	1,300
14	特定領域A	多賀 巖太郎	助手	発達過程における視覚系のバインディング問題と脳のダイナミクス	2,400
15	特定領域A	前田 京剛	助教授	伝導ノイズ及び密度ノイズ測定による高温超伝導体ボルテックスのダイナミクスの研究	2,400
16	特定領域A	大森 正之	教授	シアノバクテリア信号伝達タンパク質の分子アーキテクチャー	2,000
17	特定領域A	村田 滋	助教授	光誘起励起子移動を經由して高効率的に生成する高スピン共役電子系の創出	2,000
18	特定領域A	小川 桂一郎	助教授	結晶中の熱・光誘起プロトン移動による π 共役系への摂動：高精度X線解析による追跡	2,000
19	特定領域A	阿波賀 邦夫	助教授	Mn12核高スピクラスタ錯体の電子構造	2,300
20	特定領域A	関本 弘之	助手	藻類の有性生殖で機能する走化性フェロモンの検出・単離と生化学的解析	1,900
21	特定領域A	前田 京剛	助教授	高温超電導体のストライプの秩序の電気伝導への寄与の直接検証	1,400
22	特定領域A	加藤 雄介	助教授	銅酸化物超伝導体の渦糸状態におけるホール伝導度の符号反転現象に関する理論的研究	600
23	特定領域A	笹川 昇	助手	トリプレット・リピート増幅細胞の酸化ストレス脆弱性	2,000
24	特定領域B	馬淵 一誠	教授	細胞質分裂における収縮環形成・消滅のメカニズム	6,300
25	特定領域B	油井 大三郎	教授	アジア太平洋地域の構造変動における米国の位置と役割に関する総合的研究	39,000
26	特定領域B	山本 吉宣	教授	アジア太平洋地域の安全保障体制の変容における米国の位置と役割	4,100
27	特定領域B	滝田 佳子	教授	アジア太平洋地域における米国の位置と役割	4,000
28	特定領域B	和田 信雄	助教授	1次元および2次元 ^3He 流体の量子相の研究	2,500
29	特定領域B	風間 洋一	教授	超弦理論の非摂動的性質の研究	2,300
30	特定領域B	馬淵 一誠	教授	細胞質分裂シグナル伝達と収縮環形成のメカニズム	60,500
31	特定領域B	久我 隆弘	助教授	レーザー冷却と原子気体BECの物理の研究	36,500

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
32	特定領域B	増田 茂	助教授	分子凝集体表面の分子状態	18,800
33	特定領域C	笹川 昇	助手	筋強直性ジストロフィーのCTGリピートが多因子細胞内システムに及ぼす影響の追求	3,000
34	特定領域C	大森 正之	教授	光合成微生物の光合成遺伝子システムの解明	48,000
35	特定領域C	安田 賢二	助教授	マイクロファブリケーションを用いた単一細胞実時間発現解析	5,500
36	特定領域C	石浦 章一	教授	膜タンパク質セクレターゼ群の情報クロストーク	3,400
37	基盤A	高橋 正征	教授	海水生態系の高生産性の機構解析	8,700
38	基盤A	谷垣 真理子	助教授	返還後の香港の社会変容と周辺地域への影響に関する調査研究	6,000
39	基盤A	伊藤 元己	助教授	東南アジア熱帯の島嶼郡における植物の種分化機構と遺伝的多様性の研究	4,000
40	基盤A	小林 寛道	教授	中高齢者向け総合筋力強化トレーニングマシンシステムの構築	5,700
41	基盤A	増田 茂	助教授	極低温電子放射顕微鏡の開発と固体表面への応用	1,200
42	基盤A	福永 哲夫	教授	超音波を用いた人間の筋特性の評価システムの構築	7,000
43	基盤A	古田 元夫	教授	ベトナム北部における開放政策の展開と地域的一体性の変容	8,200
44	基盤A	松本 忠夫	教授	新熱帯における社会性昆虫類と微生物との共生関係の探索および分子系統学的研究	5,400
45	基盤A	跡見 順子	教授	ストレスタンパク質からみた身体運動の評価 (その3)	18,400
46	基盤A	松下 信之	助教授	2次元検出器型高圧専用単結晶X線回折装置の試作	30,600
47	基盤B	松原 宏	助教授	先進資本主義諸国における地域構造変動の国際比較	2,500
48	基盤B	池内 昌彦	助教授	好熱性シアノバクテリアの遺伝子操作技術の確立と光合成生産への応用	2,000
49	基盤B	甚野 尚志	助教授	教会からみた中世ヨーロッパの政治社会	6,900
50	基盤B	木村 秀雄	教授	アンデス高地における先住民社会と国家の接合と分節の人類学的研究	2,300
51	基盤B	浦 雅春	教授	演劇のインター・カルチャー的総合研究	1,300
52	基盤B	友田 修司	教授	有機軌道論—基礎有機化学における新概念の構築	1,600
53	基盤B	黒田 玲子	教授	DNAのキラリティーを利用したDNA-リガンド相互作用	1,600
54	基盤B	杉橋 陽一	教授	芸術のメディア的戦略に関する総合的研究—表象文化の歴史的機能分析—	1,500
55	基盤B	鈴木 英夫	教授	電子テキスト・アーカイブの構築とその文化研究への応答	2,000
56	基盤B	小宮山 進	教授	量子ホール電子系び位相干渉性とその制御	2,200
57	基盤B	高野 穆一郎	教授	火山、熱水環境における硫黄族元素の形態と挙動	900
58	基盤B	松本 忠夫	教授	歩行型社会性昆虫の初期巣における栄養、発育制御物質及び共生微生物の伝達・作用機構	2,500
59	基盤B	中澤 恒子	助教授	語彙の統語・意味情報処理—日英辞書検索支援システム構築にむけて	600
60	基盤B	繁樹 算男	教授	グループの意思決定の数理モデルとプロセスの記述	1,400
61	基盤B	山影 進	教授	テキスト・データ分析新手法と結合したシミュレーション・システムの開発	2,600
62	基盤B	黒田 玲子	教授	固体状態でのキラリティー認識反応の追跡	1,500
63	基盤B	川戸 佳	教授	新型共焦点ビデオ顕微鏡の開発とグリアー神経交信の解析	2,000
64	基盤B	神野志 隆光	教授	日本文学における神話テキストの〈変奏〉	2,300
65	基盤B	斎藤 兆史	助教授	文体論理論による英語・英文学研究の再編成	1,800
66	基盤B	生越 直樹	助教授	東アジア諸語のカテゴリー化と文法化に関する対照研究	4,100
67	基盤B	竹内 信夫	教授	東アジア比較文学史	2,700

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
68	基盤B	高塚 和夫	教授	ポンプ・ブロープ光電子分光法による超高速量子過程の理論研究	5,300
69	基盤B	下井 守	教授	ボラン・ルイス塩基付加物を用いるメタルリッチーメタラボランクラスター合成法の確立	2,000
70	基盤B	菅原 正	教授	チャンネル構造を有する機能変換型超分子システム	5,000
71	基盤B	大築 立志	教授	素早い正確な随意動作のタイミングコントロール特性に関する研究	6,100
72	基盤B	川戸 佳	教授	神経ステロイドによる海馬での情報記憶交信の活性化	4,600
73	基盤B	中村 雄祐	助教授	発展途上国における識字学習環境の研究—ボリビアの地域社会を対象として	4,300
74	基盤B	佐藤 良明	教授	日本の大衆文化における「うた」と「おどり」の諸相	6,200
75	基盤B	長谷川 寿一	教授	進化心理学と適応行動—領域横断的研究	3,400
76	基盤B	河合 祥一郎	助教授	英文学における心身の相関性に関する比較表象文化論的考察	2,600
77	基盤B	岡部 雄三	教授	日独における「固有文化」とグローバリゼーションの比較文化論的研究	6,800
78	基盤B	木畑 洋一	教授	欧州統合と対EU戦略の国際比較	6,800
79	基盤B	山影 進	教授	ASEAN統合の深化と拡大がアジア広域秩序に及ぼす影響	4,200
80	基盤B	米谷 民明	教授	非摂動的M理論の構築	3,300
81	基盤B	永田 敬	教授	超臨界二酸化炭素中のクラスター負イオン構造とその反応	5,400
82	基盤B	大森 正之	教授	植物環境応答機構におけるcAMP信号伝達系の分子生理学	6,200
83	基盤B	深津 晋	助教授	実空間トランスファを利用したシリコンベース量子構造による遠赤外光発生	6,300
84	基盤B	金久 博昭	助教授	日本人の生活遂行能力（ライフ・フィットネス）に関する研究	5,200
85	基盤B	豊島 陽子	助教授	ダイニン分子のATP結合部位の機能と役割	8,200
86	基盤B	兵頭 俊夫	教授	陽電子消滅誘起特性X線分光法の開発	8,200
87	基盤B	馬淵 一誠	教授	細胞質分裂における収縮環形成のメカニズム	4,500
88	基盤B	深津 晋	助教授	シリコンゲルマニウム混品の異常吸収バンドを利用した「表面」光検出器の開発研究	4,300
89	基盤B	磯崎 行雄	助教授	ブルームの冬と史上最大の大量絶滅事件	6,200
90	基盤C	上田 博人	教授	ペルー・リマ・サンチャゴにおけるスペイン語の言語景観の観察・調査	500
91	基盤C	菅原 克也	助教授	幻想に彩られた西洋への巡礼・郷愁に彩られた日本への回帰	1,800
92	基盤C	嶋田 正和	助教授	多階層格子シミュレーション解析によるカワラノギクの動態予測と絶滅リスクの評価	1,400
93	基盤C	三谷 博	教授	東アジアにおける「公論」形成の比較史的研究	1,400
94	基盤C	宮本 久雄	教授	ヘブライ思想・ギリシャ教父と現代思潮との比較思考研究とそれに基づく新倫理学の構築	500
95	基盤C	村田 純一	教授	意識—その科学と現象学—	500
96	基盤C	石光 泰夫	教授	身体の理論に基づく舞踊の統合的研究	500
97	基盤C	岩本 通弥	助教授	戦没者祭祀と祖先観の変容に関する民族学的研究—新潟県佐渡の墓碑・忠魂碑・護国神社	500
98	基盤C	石井 明	教授	戦後中国の対日政策形成	900
99	基盤C	小河 正基	助教授	2次元マントル大循環モデル構築へ向けて—マントル進化におけるリソスフェアの役割	900
100	基盤C	染田 清彦	助教授	化学反応の統計的振舞の発現機構の解明	800
101	基盤C	池内 昌彦	助教授	シアノバクテリア（ラン藻）の光適応現象にかかわる遺伝子の探索と応答機構の解析	500
102	基盤C	永田 淳嗣	助教授	都市化・産業化の進展と周辺地域の資源利用に関する東南アジア・日本比較研究	500
103	基盤C	丹羽 清	教授	革新的研究開発の構想立案機構の研究	700

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
104	基盤C	高橋 哲哉	助教授	トラウマと歴史—ホロコーストの記憶の精神分析学的解釈と歴史哲学	700
105	基盤C	信原 幸弘	助教授	意識の自然化	900
106	基盤C	草光 俊雄	教授	消費社会成立史の日欧比較研究	900
107	基盤C	内野 儀	助教授	1960年代以降の現代アメリカ演劇についての比較文化的研究	1,200
108	基盤C	坪井 栄治郎	助教授	事態把握のタイポロジーについての認知言語学的研究	700
109	基盤C	高田 康成	教授	英文学における「古典」の言説に関する表象文化論的考察	1,300
110	基盤C	坂原 茂	教授	メンタル・スペース理論による変化述語の研究	900
111	基盤C	大貫 隆	教授	古代地中海世界における欲望と禁欲	1,200
112	基盤C	木宮 正史	助教授	アジア経済危機の政治的帰結に関する比較研究：韓国の事例を中心にして	600
113	基盤C	久具 佳子(古城)	教授	第二次世界大戦後の資本移動の増大に対する国家の政策および国際レジームの事例研究	1,000
114	基盤C	蜂巢 泉	助教授	Ia型超新星の進化モデルの構築とその総合的応用	600
115	基盤C	箕口 友紀	助手	超流体—固体転移におけるインスタビリティ順序	400
116	基盤C	小川 桂一郎	助教授	有機結晶のサーモクロミズム：X線回折法による追跡	1,100
117	基盤C	小林 啓二	教授	固相有機イオン反応の設計と解析	1,000
118	基盤C	松下 信之	助教授	高圧力を利用した金属錯体分子システムの新機能・物性の探索	800
119	基盤C	伊藤 元己	助教授	小笠原固有植物の適応放散の種分化と種内集団構造の解析	1,400
120	基盤C	尾中 篤	助教授	大環状オレフィン合成のためのナノ空間メタセシス触媒の開発	800
121	基盤C	瀬川 浩司	助教授	ポルフィリン高分子錯体の三次元構造構築と電子遷移制御	1,500
122	基盤C	小堀かおる(古屋)	助手	「筋長・張力・動き」が骨格筋に及ぼす影響	900
123	基盤C	山田 茂	助教授	筋肉増強剤の効果とその副作用に関する検討	500
124	基盤C	鈴木 賢次郎	教授	液晶シャッター式両眼立体視を用いた心的切断テスト	1,600
125	基盤C	池上 高志	助教授	ゲームの発生と相互作用する動的認識ネットワークのダイナミクスの複雑さの研究	1,400
126	基盤C	金子 邦彦	教授	生命システムの持つ多様化、分化、情報生成、動的安定性の原理	1,800
127	基盤C	今井 知正	教授	哲学的ディスクールにおける歴史的思考の問題	1,700
128	基盤C	田中 純	助教授	イメージとその記憶の分析に関する方法論的思想史的研究	1,400
129	基盤C	ロバートキャンベル	助教授	明治期予約出版の総合比較研究	1,300
130	基盤C	伊藤 徳也	助教授	「生活の芸術」の系譜と近代中国知識人の位置	500
131	基盤C	刈間 文俊	教授	漢字文化圏の言語と「近代」に関する総合的研究	1,500
132	基盤C	小川 浩	教授	後期古典英語散文における‘Wulfstan imitators’のテキストと言語の研究	1,300
133	基盤C	宮本なほ子	助手	エキゾティシズムの東西—ロマン主義「異国」と江戸の「異国」	1,300
134	基盤C	林 文代	教授	言語文化政策の観点から見た英米メディアの分析	1,200
135	基盤C	宮下 志朗	教授	19世紀フランスにおける、著作権・印税システムと作家の関係について	1,500
136	基盤C	松村 剛	助教授	中世フランス語版「グラティアヌス教令集」の言語地理学的・文献学的語彙研究	1,300
137	基盤C	川中子 義勝	教授	ドイツ近代文学の伝統批判・形成における宗教的修辞の系譜その文体論的研究	1,000
138	基盤C	今橋 映子	助教授	20世紀＜バリ写真＞と文学—都市表象をめぐる言語とイメージの相関研究	1,300
139	基盤C	恒川 恵市	教授	ラテンアメリカにおける民主化の比較分析と民主化理論の再検討	1,200

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
140	基盤C	上野 宗孝	助手	Tタウリ型星の赤外線モニター観測	2,200
141	基盤C	江里口 良治	教授	渦無し連星中性子星の準定常状態構造を求める一般相対論の数値計算法の開発	2,800
142	基盤C	加藤 光裕	助教授	非可換幾何学的アプローチによる超弦理論の非摂動的定式化	1,600
143	基盤C	吉岡 大二郎	教授	非量子化量子ホール系の基底状態に関する研究	1,200
144	基盤C	長嶋 泰之	助手	気体中のポジトロニウムの熱化に対する気体分子永久双極子モーメントの効果	2,700
145	基盤C	国場 敦夫	助教授	量子群の結晶基底とその応用	1,100
146	基盤C	堂前 雅史	助手	科学知識の生産・流通・受容過程の解明	1,300
147	基盤C	八田 秀雄	助教授	乳酸輸送担体 (MCT) の発現量の変化が運動時及び運動後の乳酸の代謝に与える影響	1,600
148	基盤C	深代 千之	助教授	ブレインサイエンスにシミュレーションから接近する	1,400
149	基盤C	小島 武次	講師	様々な打動作で、体幹のその長軸回りの回転を生み出す下肢の動作分析	2,500
150	基盤C	荒井 良雄	教授	日中都市における生活活動システムの時間地理学的比較研究	2,200
151	基盤C	永野 三郎	教授	協調戦術を適応学習するエージェントの構築と分析	2,500
152	基盤C	佐々 真一	助教授	大自由度力学系における不可逆性の法則化	1,800
153	萌芽的	足立 信彦	助教授	ドイツにおける多元的文化論の成立と展開	600
154	萌芽的	藤井 聖子	助教授	対照意味論・対照語用論的研究の方法と理論の構築	500
155	萌芽的	大森 正之	教授	微生物細胞集団による周囲の形状の認識機構の解明	700
156	萌芽的	福永 哲夫	教授	人間の骨格筋ダイナミクスのリアルタイム計測の試み	500
157	萌芽的	松田 良一	助教授	両生類イモリの心臓における再生に関する分子細胞生物学的研究	900
158	萌芽的	丹野 義彦	助教授	健常者の幻覚様体験の研究：精神分裂病の幻覚との比較研究と因果的発生研究	900
159	萌芽的	長谷川 博子	助教授	反ダイエティズムに向けての歴史人類学的研究	1,100
160	萌芽的	和田 信雄	助教授	量子相転移における臨界圧縮率の測定	1,400
161	奨励A	竹内 孝宏	助手	西欧表象文化史における「窓」の概念の研究	500
162	奨励A	大久保 譲	助手	後期ヴィクトリア朝文学における「大衆」イメージの形成に関する研究	900
163	奨励A	小林 宣子	講師	中世イギリス文学における騎士道イデオロギーの形成と騎士階級批判の展開に関する考察	1,000
164	奨励A	遠藤 貢	助教授	グローバル化がもたらすローカルな政治的影響に関する実証研究：アフリカの事例	700
165	奨励A	土井 靖生	助手	遠赤外線多素子検出器の開発	1,000
166	奨励A	柴田 尚和	助手	密度行列繰り込み法による低次元強相関電子系の研究	900
167	奨励A	鳥居 寛之	助手	微細キャビラリーを用いて生成する中空原子の散乱角度分解可視・X線分光	600
168	奨励A	牛山 浩	助手	生体内化学反応における量子トンネル効果の役割	800
169	奨励A	岩岡 道夫	助手	有機セレン試薬を用いたタンパク質分子の酸化還元制御	800
170	奨励A	河野 泰朗	助手	新規なシリルボランおよびスタニルボラン配位子の開発とその金属錯体合成への展開	1,200
171	奨励A	関本 弘之	助手	ミカツキモの有性生殖に機能する走化性タンパク質の分子解析	900
172	奨励A	村田 隆	講師	植物微小管におけるガンマチューブリンの存在様式の解析	700
173	奨励A	川上 泰雄	助手	人間の筋特性（大きさ・力強さ・しなやかさ）の加齢に伴う変化と身体活動能力との関係	900
174	奨励A	平工 志穂	助手	身体運動課題におけるエラー反応時の脳内情報処理過程の検討	1,000
175	奨励A	増原 英彦	助手	自己反映言語による並列・分散アプリケーション記述の改善	600

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
176	奨励A	植田 一博	助教授	創造的問題解決における洞察の分析とモデル化	600
177	奨励A	柳澤 修一	助手	トウモロコシの転写制御因子Dof1の光応答の分子メカニズム	1,000
178	奨励A	中野 賢太郎	助手	分裂酵母を用いたアクチン細胞骨格の制御機構の解明	600
179	奨励A	水野 一乗	助手	コラーゲンゲル培養系による擬似生体組織の開発	1,100
180	奨励A	當間 千代子	助手	H.R.ギーガーを中心とする「サブカルチャー」の定義をめぐる日米比較研究	1,200
181	奨励A	望月 聡	助手	他動詞的行為の脳内表象に関する臨床・実験神経心理学的研究	700
182	奨励A	井坂 理穂	講師	20世紀前半のインドにおける地域アイデンティティとナショナリズム	1,700
183	奨励A	T・C Damian	助教授	数量化表現の照応語	1,400
184	奨励A	岩月 純一	助手	近代東アジア諸国（特にベトナム）における「国語」概念形成過程の研究	1,100
185	奨励A	若松 邦弘	助手	民族的マイノリティの社会統合を目的とする政策の運営に関する研究	1,100
186	奨励A	大庭 三枝	助手	アジア太平洋地域概念の成立過程におけるASEAN諸国の役割	1,500
187	奨励A	久松 佳彰	助手	メキシコの電子産業における米国系契約製造企業の展開がメキシコ国内経済に与える影響	500
188	奨励A	澤田 康幸	助教授	経済発展プロセスにおける貨幣経済の波及とコミュニティ組織の変容ーアジア諸国の比較	1,100
189	奨励A	安富 歩	助教授	20世紀前半の満州における市場構造とその変遷	1,200
190	奨励A	加藤 雄介	助教授	超伝導体の渦糸状態における電荷ゆらぎと輸送現象の理論的研究	1,200
191	奨励A	原田 潤	助手	X線結晶解析による有機フォトクロミック化合物の着色体構造の解明	1,600
192	奨励A	川本 清	助手	SiGe混晶表面の初期酸化過程のその場観察	1,700
193	奨励A	横山 ゆりか(今井)	助手	専門家・非専門家の空間設計に見られる描図過程の認知論的研究	1,200
194	奨励A	杉山 享	助手	任意の二重らせんDNAを標的とできる人工リプレッサーの医薬分子設計	1,300
195	奨励A	神崎 素樹	助手	立位姿勢調節への伸張反射の重要性を求心性神経活動および筋線維動態から解明する	1,100
196	奨励A	政二 慶	助手	静的立位時における下腿三頭筋機能分担の解明およびその加齢変化の検討	1,200
197	奨励A	木原 昌子(岩本)	助手	大腸菌ATP合成酵素：変異γサブユニットの回転によるエネルギー共役機構の解明	1,000
198	奨励A	福井 彰雅	助手	ツメガエル卵母細胞におけるアクチビン情報伝達の解析	1,200
199	特別研究 促進費	小林 寛道	教授	発育発達及び社会生活的側面から見た青少年の体力低下の要因に関する分析的研究	2,500
200	特別研究員 奨励費	東田 範子	DC1	中央アジア5ヶ国における「民族音楽」の制度化とその受容の過程	900
201	特別研究員 奨励費	今泉(安楽)温子	PD	ミヤコグサ・ミヤコゲサ共生菌共生変異体を用いた根粒形成時の宿主防御応答抑制機構	1,200
202	特別研究員 奨励費	松永 友有	PD	イギリスにおける自由党急進派の政策的特質	600
203	特別研究員 奨励費	佐久間 雅	PD	理想グラフにおける強い予想に関する点彩色構造について	1,200
204	特別研究員 奨励費	武藤 知巳	PD	弦理論における時空の構造の研究	1,200
205	特別研究員 奨励費	鈴木 美智子	PD	近代日本における女性自己形成小説に関する比較文学・社会文化史的考察	800

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	
206	特別研究員 奨励費	佐藤 正則	PD	ポリシェヴィキの人間観と宇宙観、その形成過程およびスターリニズムへの影響	800
207	特別研究員 奨励費	久木元 真吾	PD	"life"の比較社会学	900
208	特別研究員 奨励費	早川 洋一	PD	カジカ類を中心とする魚類の異型精子の機能形成学的研究	1,200
209	特別研究員 奨励費	坪井 禪吾	PD	ベーテ仮説法の数理	1,200
210	特別研究員 奨励費	清水 剛	講師	経営組織の生成から消滅までのプロセスの計量分析	900
211	特別研究員 奨励費	山下 範久	DC1	世界史的文脈における近世的地域システムの比較研究	500
212	特別研究員 奨励費	濱崎 加奈子	DC1	日本の古典芸能における「芸」	900
213	特別研究員 奨励費	土屋 良重	DC1	固有ジョセフソン接合アレーにおける高周波特性の研究	900
214	特別研究員 奨励費	黒田 啓行	DC1	植食性昆虫の生活史スケジュールの進化	900
215	特別研究員 奨励費	鄭 榮龍	DC1	包括的な他者の創造・表象の機制	900
216	特別研究員 奨励費	村上 達也	DC1	北部低地における古代マヤの政治過程の研究	900
217	特別研究員 奨励費	福永 美和子	DC1	東西ドイツ創設期における「ナチズム問題」の比較分析	500
218	特別研究員 奨励費	外山 弥呂	DC1	19世紀以来の仏哲学におけるベルクソンとバシュラールのもつ意義の思想史的考究	500
219	特別研究員 奨励費	清水 祐公子	DC1	波長可変なラゲールガウスビームを利用した中性原子のトラップ法の開発	900
220	特別研究員 奨励費	檜垣 浩之	PD	非中性プラズマ（電子、陽電子、イオン、反陽子）の閉じ込め及びプラズマ特性の研究	1,200
221	特別研究員 奨励費	加藤 淳子	教授	地方政府の政策決定に対する影響力の比較研究	1,000
222	特別研究員 奨励費	遠藤 泰樹	教授	ジェット冷却された不安定分子の回転分光	1,000
223	特別研究員 奨励費	長谷川 寿一	教授	霊長類の社会生態およびヒトの配偶者選択における進化プロセス	800
224	特別研究員 奨励費	竹之内 裕文	PD	言語と歴史	800
225	特別研究員 奨励費	青木 誠志郎	PD	タバコ属植物におけるNgrol遺伝子群の進化学的解析	1,200

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	
226	特別研究員 奨励費	梅田 真樹	PD	古生代デボン紀後期の生物大量絶滅の原因の解明	1,200
227	特別研究員 奨励費	田中 俊明	PD	親子関係の進化心理学的研究	1,200
228	特別研究員 奨励費	吉田 脩	PD	国際体制論（国際レジーム）の法的検証	1,200
229	特別研究員 奨励費	中嶋 聖雄	PD	現代中国都市部における社会階層とその変動	800
230	特別研究員 奨励費	今本 修司	PD	現代リベラリズムの基礎づけとその応用	800
231	特別研究員 奨励費	松本 由起子	PD	都市としての身体	1,300
232	特別研究員 奨励費	法野谷 俊哉	PD	行為とPersonの分析哲学的研究	800
233	特別研究員 奨励費	福井 裕之	PD	近世近代の日本倫理思想におけるミメーシス（自然を模倣するという制作概念）の射程	1,200
234	特別研究員 奨励費	斎藤 弘樹	PD	ポーズ凝縮した原子集団と輻射場の相互作用	1,000
235	特別研究員 奨励費	鈴木 禎宏	PD	バーナード・リーチの芸術に関する比較文化的研究	1,200
236	特別研究員 奨励費	井関 正久	PD	1970年代から現在に至る旧東西ドイツ市民運動の政治社会学的比較研究	800
237	特別研究員 奨励費	東 浩紀	PD	ジャック・デリタの思想におけるメディア環境の精神分析的位置付けについて	800
238	特別研究員 奨励費	佐藤 譲	PD	力学系的視点に基づく計算理論の再構築	900
239	特別研究員 奨励費	伊藤 高臣	PD	相対論的重イオンビームによる原子および原子核準位間の干渉性共鳴励起	900
240	特別研究員 奨励費	八十田 博人	PD	戦後イタリアの欧州政策の形成過程（1947～57）	400
241	特別研究員 奨励費	船戸 修一	PD	近代日本における農本主義（農本思想）の歴史社会学的再構成	900
242	特別研究員 奨励費	伏見 岳志	DC2	メキシコ・ユカタン植民地における防衛と貿易	500
243	特別研究員 奨励費	半谷 史郎	DC2	ロシアにおけるドイツ人	900
244	特別研究員 奨励費	市川 美南子	DC2	現代国際社会における市民権と人権	500
245	特別研究員 奨励費	小野 正嗣	DC2	フランス語圏クレオール文化・文学研究	900

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	
246	特別研究員 奨励費	竹内 晶子	DC2	文学理論の応用によって分析する、謡曲の劇的構成および世阿弥作能の特徴	400
247	特別研究員 奨励費	工藤 紀雄	DC2	好熱性古細菌の転写・複製機構の構造生物学的解明	900
248	特別研究員 奨励費	満島 直子	DC2	デイドロ思想における「感覚」の射程	500
249	特別研究員 奨励費	大島 真木子	DC2	国際環境法における法の一般化と個別化	900
250	特別研究員 奨励費	大林 夏湖	DC2	巻貝の表現型における反応基準と遺伝的変異量の解析	900
251	特別研究員 奨励費	古澤 力	DC2	細胞分化の数値モデルによる解析	900
252	特別研究員 奨励費	茂木 文夫	DC1	分裂酵母のⅡ型ミオシン重鎖Myo2およびMyo3の機能分析	900
253	特別研究員 奨励費	内藤 千珠子	DC1	言説空間における差別の諸相	500
254	特別研究員 奨励費	塩出 浩之	DC1	人口移出問題から見た明治日本のナショナリズム	500
255	特別研究員 奨励費	中條 浩一	DC1	CDNA発現系を用いた筋発生におけるカルシウムチャネルの機能的局在機構の解明	900
256	特別研究員 奨励費	木立 尚孝	DC1	量子ホール効果のプラトー転移に対する場の理論的研究	900
257	特別研究員 奨励費	津村 文彦	DC1	タイ東北部ラオ系民族における宗教実践の研究	900
258	特別研究員 奨励費	小林 彩	DC1	寄生蜂の性比調節の遺伝的背景と進化的動態の解明	900
259	特別研究員 奨励費	古賀 毅	DC1	タンパク質リン酸化を介した神経伝達物質放出の制御機構の解明	900
260	特別研究員 奨励費	亀井 綾子	DC1	Synechocystic PCC6803の強光感受性に関与した遺伝子の解析	900
261	特別研究員 奨励費	川喜田 敦子	DC1	ドイツ連邦共和国における被追放民の統合と歴史意識の変容	500
262	特別研究員 奨励費	井上 彰	DC1	ハイエクとポパーの思想の検討を中心とした「秩序問題」と「不正義論」の再構成	500
263	特別研究員 奨励費	福嶋 健二	DC1	中心対称性を持つ有効理論を用いたQCDへの非摂動的アプローチ	900
264	特別研究員 奨励費	戸川 欣彦	DC1	高温酸化物超伝導体の磁気特性	900
265	特別研究員 奨励費	高田 則雄	DC1	脳細胞における情報伝達物質のリアルタイム蛍光顕微イメージング	900

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	
266	特別研究員 奨励費	セン 徳川	DC1	両生類の腎形生における分子生物学的研究	900
267	特別研究員 奨励費	平石 界	DC1	思考における認知バイアスの進化心理学的研究	900
268	特別研究員 奨励費	山中 信弘	PD	反陽子ヘリウム原子の超微細構造に関する理論研究	1,200
269	特別研究員 奨励費	小倉 尚志	助教授	生体エネルギー変換系における水素イオン能動輸送機構の振動分光学的研究	800
270	特別研究員 奨励費	嶋田 正和	助教授	キイロショウジョウバエ実験系における密度依存的な自然選択下での窒素老廃物代謝	1,400
271	特別研究員 奨励費	増田 茂	助教授	高配向有機薄膜の表面電子状態	900
272	特別研究員 奨励費	小牧 研一郎	教授	超低速反陽子と原子、分子衝突のダイナミックス	1,000
273	特別研究員 奨励費	金子 邦彦	教授	Q β レプリカーゼを用いた人工細胞系の構築	1,000
274	特別研究員 奨励費	三宅 芳夫	PD	戦後思想の再検討	1,200
275	特別研究員 奨励費	中野 剛充	PD	現代コミュニタリアニズムの理論と実践	1,200
276	特別研究員 奨励費	渡邊 日日	PD	脱ソヴィエト・ブリヤート共和国から見た農村共同体における知識分布と社会分化の探求	1,200
277	特別研究員 奨励費	小森 靖	PD	長距離相互作用を持つ一次元量子多体系の代数的解析とその応用	1,200
278	特別研究員 奨励費	川上 茂樹	PD	ウィルスの細胞間移行機構の解明	1,500
279	特別研究員 奨励費	鈴木 良和	PD	ミオシンの化学力学反応と分子内構造変化の共役関係を解明する新たなアプローチ	1,500
280	特別研究員 奨励費	安池 智一	PD	複素座標法による超励起状態の研究	1,200
281	特別研究員 奨励費	田中 祐理子	PD	私学言語による身体把握の現状と病の概念の相関について	800
282	特別研究員 奨励費	坂井(正鉢)朝香	PD	EUにおける下位国家主体の権限強化	800
283	特別研究員 奨励費	本間 栄男	PD	医学教科書を通して見る17世紀オランダにおける機械論的生理学の展開	800
284	特別研究員 奨励費	前川 清人	PD	ゴキブリ類の社会進化に関する分子生態学的研究	1,200
285	特別研究員 奨励費	秋山 珠子	DC2	現代中国文化変容論	1,000

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	
286	特別研究員 奨励費	中谷 基志	DC2	イマーニ・テンブル	900
287	特別研究員 奨励費	渡辺 愛子	DC2	現代英国におけるアイデンティティ形成とその行方	600
288	特別研究員 奨励費	渋井 進	DC2	顔表情の識別過程に関する実験的検討	1,000
289	特別研究員 奨励費	河井 苑子	DC2	国際法上の収用概念	1,000
290	特別研究員 奨励費	金沢 百枝	DC2	中世ヨーロッパの世界像に関する図像学的研究	600
291	特別研究員 奨励費	橋本 順光	DC2	英国黄禍論小説の研究1890-1914	600
292	特別研究員 奨励費	湖上 杜太郎	DC2	電子のダイナミクスを考慮した化学反応基礎理論の構築	1,000
293	特別研究員 奨励費	染谷 昌義	DC2	知覚心理学における現象学的考察の具体的展開とその意義	600
294	特別研究員 奨励費	小林 哲生	DC2	数の認知に関する比較認知科学的検討	1,000
295	特別研究員 奨励費	波多野 恭弘	DC2	非平衡定常状態の熱力学を操作論的な観点から構築すること	600
296	特別研究員 奨励費	河野 行雄	DC2	遠赤外光技術を利用した量子輸送現象の研究	1,000
297	特別研究員 奨励費	金 賢旭	DC2	日本・韓国における演劇発生と比較研究	500
298	特別研究員 奨励費	古屋 博子	DC2	在外ベトナム人とベトナムの国民統合	1,000
299	特別研究員 奨励費	早田 匡芳	DC2	ツメガエルの初期発生の胚葉形成に関わる新規遺伝子のクローニングと解析	1,000
300	特別研究員 奨励費	森本 元太郎	DC1	動的認識システムの発達モデルと、適切な学習課題の検討	1,000
301	特別研究員 奨励費	臼井 文彦	DC1	連星中性子の構造と安定性についての研究	1,000
302	特別研究員 奨励費	野村 健太郎	DC1	低次元相関電子系における電気伝導性の研究	1,000
303	特別研究員 奨励費	杵掛 展之	DC1	霊長類における社会交渉時の意思決定	1,000
304	特別研究員 奨励費	今藤 夏子	DC1	アズキノウムシに寄生する利己的遺伝因子Wolbachiaの感染動態と共進化の解明	1,000
305	特別研究員 奨励費	村松 哲行	DC1	行列モデルによる超弦理論の非摂動的性質の研究	1,000
306	特別研究員 奨励費	菅原 由隆	DC1	シリコン系量子構造の光学遷移制御とデバイス応用	1,000

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	
307	特別研究員 奨励費	巖 麗京	DC1	近代日本神道の形成史的研究	1,000
308	特別研究員 奨励費	西野 淑美	DC1	都市概念と生活形態との連動的変遷に関する歴史的・実証的研究	900
309	特別研究員 奨励費	隠岐 さや香	DC1	コンドルセの社会数学と科学アカデミーの政治学	900
310	特別研究員 奨励費	日高(江口)優	DC1	1930年代後半から1970年代半ばアメリカ写真におけるパラダイム・シフト	600
311	特別研究員 奨励費	豊福 実紀	DC1	日本における政府の所得再分配をめぐる比較政治分析	600
312	特別研究員 奨励費	西村 美香	DC1	他国間条約制度とその他の条約から差別化できる根拠	900
313	特別研究員 奨励費	祐川 良子	DC1	システムとしての「アフリカ現代美術」のダイナミズムに関する人類学的考察	1,000
314	特別研究員 奨励費	奥島 真一郎	DC1	応用一般均衡モデルによる環境政策の社会経済学的分析	1,000
315	特別研究員 奨励費	岡本 忍	PD	ラン藻のゲノム情報に基づいた生理機能の解析	1,100
316	特別研究員 奨励費	米谷 民明	教授	場の理論と弦理論によるブラックホール	1,200
317	特別研究員 奨励費	小牧 研一郎	教授	反陽子原子の生成機構の研究	900
318	特別研究員 奨励費	金子 邦彦	教授	緑色蛍光タンパク質を用いた細胞分化への構成的アプローチ	1,000
319	特別研究員 奨励費	村田 雄二郎	助教授	梁漱溟の東西文化観と郷村建設運動	500

2000(平成12)年度 奨学寄附金

13.1.9現在(受託決定分)

受入番号	寄附者	金額	官職・名前	研究テーマ
1	荒井良雄（財団法人鹿島学術振興財団）	2,500,000	教授 荒井良雄	東京大都市圏における郊外核（Edge City）形成の可能性に関する基礎的研究—21世紀における『大都市圏像』の展望—
2	東日本レイク株式会社	200,000	助手 篠原 稔	
3	日産化学工業株式会社研究推進室	500,000	教授 菅原 正	新しい有機機能性材料に関する研究
4	東京ファブリック工業株式会社	1,000,000	教授 大澤吉博	
5	財団法人池谷科学技術振興財団	1,000,000	助教授 松下 信之	自己組織型混合原子価金属錯体の液晶性
6	昭和電工株式会社総合研究所川崎研究室	1,000,000	助教授 尾中 篤	
7	村田純一（財団法人日産科学振興財団）	1,600,000	教授 村田純一	20世紀における科学技術の史的展開が科学技術観の変遷に及ぼした影響
8	財団法人東京大学出版会	320,000	助教授 久我 隆弘(基礎実験・実習委員会)	
9	鬼塚ヒサ	5,000,000	研究科長 浅野 攝郎	国際社会科学専攻に在籍する外国人留学生(大学院生及び研究生)に対する奨学金
10	株式会社三啓	600,000	教授 川戸 佳	
11	株式会社日立製作所中央研究所	480,000	助教授 安田 賢二	
12	三共株式会社	1,000,000	教授 黒田 玲子	DNAと薬物との相互作用の分子レベルでの研究その22
13	磯崎行雄（社団法人東京地学協会）	500,000	教授 磯崎 行雄	海山頂部相上部ヘルム系石灰岩の生層序および岩層序の研究—超海洋中央部での大量絶滅事件と浅海環境の変遷
14	財団法人石本記念デサントスポーツ科学振興財団	400,000	助教授 山田 茂	
15	財団法人旭硝子財団	1,500,000	助教授 加藤 淳子	
16	小林製薬株式会社小林メディカル事業部	500,000	教授 福林 徹	関節に関する基礎的・医学的研究
17	株式会社ナリシゲ	50,000	助教授 小川 桂一郎	
18	味の素株式会社アミノサイエンス事業本部栄養食品事業推進部	1,500,000	教授 小林 寛道	
19	味の素株式会社アミノサイエンス事業本部栄養食品事業推進部	1,000,000	教授 福林 徹	
20	伊藤元己（財団法人新技術開発財団）	1,900,000	助教授 伊藤 元己	平成12年度植物研究助成小笠原絶滅危惧植物の遺伝的多様性と環境適応の解析
21	東和科学株式会社	500,000	教授 高橋 正征	
22	株式会社東芝研究開発センター	500,000	助教授 山口 泰	バーチャルエンタプライズの研究
23	財団法人日中医学協会	300,000	教授 林 利彦	
24	大正製薬株式会社	2,000,000	教授 林 利彦	
25	財団法人アメリカ研究振興会	4,000,000	アメリカ太平洋地域研究センター長 油井 大三郎	2000年度センターの運営ならびに他の諸活動のため
26	松下技研株式会社	1,000,000	助教授 開 一夫	

受入番号	寄附者	金額	官職・名前	研究テーマ
27	三角洋一（阿部秋生先生を偲ぶ会）	100,000	教授 神野志 隆光(前期課程国文・漢文学部会)	
28	日本化薬株式会社医薬事業本部診断薬室	7,500,000	教授 赤沼 宏史	1.5AGの代謝学的研究
29	キリンビール株式会社医薬事業本部企画部	1,000,000	教授 浅島 誠	
30	丹野義彦（安田生命社会事業団）	470,000	助教授 丹野 義彦	
31	ドイツ学術交流会東京事務所（ドイツ学術交流会）	12,365,830	ドイツ・ヨーロッパ研究寄付講座	
32	村田純一（財団法人日産科学振興財団）	900,000	教授 村田 純一	20世紀における科学技術の史的展開が科学技術観の変遷に及ぼした影響
33	長谷川博子（財団法人三菱財団）	2,200,000	助教授 長谷川 博子	出産の社会史—17～18世紀のアルザス・ロレーヌを中心に—
34	財団法人日本健康開発財団	800,000	助手 政二 慶	
35	三共株式会社	1,000,000	教授 黒田 玲子	DNAと薬物との相互作用の分子レベルでの研究その23
36	株式会社デジタルメディアファクトリー	550,000	助手 清野 聡子	毎洋生物を対象とした3次元モーションデータベースおよびモーション生成システムの開発
37	財団法人カシオ科学振興財団	1,000,000	助手 政二 慶	立位姿勢の力学的・生理学的解析を基にした直立保持能力の評価方法の開発
38	大塚製薬株式会社	2,000,000	教授 福永 哲夫	
39	財団法人総合研究奨励会	150,000	教授 高塚 和夫	大気汚染物質の発生消滅に関する分子論的機構の解明
合計		60,885,830		

2000(平成12)年度 受託研究

13.1.9現在(受託決定分)

受入番号	委託団体	受託担当者	金額	タイトル
1	科学技術振興事業団	深津 晋	1,000,000	マイクロ安定化半導体スーパーヘテロ界面の高度光機能化
2	科学技術振興事業団	関本 弘之	500,000	植物における異性の認識と有性生殖成立の機構
3	科学技術振興事業団	川口 正代司	1,600,000	ミヤコグサで開く根粒共生系の分子遺伝学
4	科学技術振興事業団	阿波賀 邦夫	500,000	有機・無機ナノコンポジットの動的な磁気的性質
5	畜産試験場	福井 彰雅	2,785,000	動物胚(両生類)の胞胚形成因子の検索と利用技術
6	日本中央競馬会競走馬総合研究所	福永 哲夫	3,500,000	超音波を用いた馬の筋腱の動態観察法に関する基礎的検討
7	松下電工株式会社	石井 直方	20,000,000	高齢者のフィットネス向上のための新しいシステムの開発
8	株式会社竹中工務店	小林 寛道	2,600,000	低酸素下における各種運動の生理的効果に関する研究
9	医薬品副作用被害救済・研究振興調査機構	林 利彦	7,000,000	臓器最小機能単位の構築
10	科学技術振興事業団	前田 京剛	1,650,000	Vortex状態のダイナミクスの理解
11	科学技術振興事業団	小倉 尚志	990,000	チトクロム酸化酵素の水素イオン能動輸送機構の時間分解赤外分光学的研究
12	科学技術振興事業団	染田 清彦	500,000	フェムト秒領域の光反応コントロール
13	科学技術振興事業団	小宮山 進	3,003,000	量子構造を用いた遠赤外光技術の開拓と量子物性研究
14	科学技術振興事業団	菅原 正	3,498,000	超構造分子の創製と有機量子デバイスへの応用
15	科学技術振興事業団	氷上 忍	1,000,000	エネルギー準位相関と量子カオス
16	科学技術振興事業団	清水 明	3,000,000	量子場操作
17	科学技術振興事業団	浅島 誠	8,800,000	器官形成の分子機構
18	生物系特定産業技術研究推進機構	大森 正之	18,000,000	耐乾性ラン藻の耐乾機構解明とラン藻を利用した荒廃乾燥土壌修復技術の開発
19	科学技術振興事業団	酒井 邦嘉	3,300,000	脳における言語獲得装置の解析
20	財団法人テレコム先端技術研究支援センター	山口 泰	3,200,000	新世代ネットワークのための画像・形状処理技術の融合
21	財団法人健康・体力づくり事業財団	福永 哲夫	8,800,000	高齢者の生活機能の維持・増進と社会参加を促進する地域システムに関する研究
22	財団法人日本宇宙フォーラム	石浦 章一	4,767,000	微小重力環境下における筋萎縮防止に関する研究
23	財団法人日本宇宙フォーラム	石井 直方	4,317,600	微小重力環境が筋・骨格系のコラーゲン代謝に及ぼす影響
24	科学技術振興事業団	黒田 玲子	4,000,000	巻貝左右巻型決定因子同定のための解析技術開発
25	科学技術振興事業団	黒田 玲子	2,900,000	固相における分子間相互作用解析技術の開発
26	科学技術振興事業団	木原 昌子	990,000	F/V-ATPaseの回転機構
27	野菜・茶業試験場	渡辺 雄一郎	4,393,000	21世紀グリーンフロンティア研究、植物・動物・昆虫を用いた有用物質生産系の確立
28	国立精神・神経センター	石浦 章一	2,000,000	筋強直性ジストロフィー病態の分子論的解明と治療
29	国立精神・神経センター	松田 良一	2,000,000	衛星細胞を含む筋肉細胞移植による筋ジストロフィー治療の試み
30	農業生物資源研究所	川口 正代司	10,327,000	植物-微生物相互作用における特異性の遺伝的基盤の解明

受入番号	委託団体	受託担当者	金額	タイトル
31	科学技術振興事業団	後藤 則行	836,000	地球温暖化問題における国際協調の政治経済学的分析
32	社団法人マリノフォーラム21	高橋 正征	4,200,000	深層水活用型漁場造成のための総合システムの開発
33	小野薬品工業株式会社	石浦 章一	2,600,000	アルツハイマー病に関わるアミロイド前駆体蛋白質の代謝制御とその細胞毒性に関する研究
34	科学技術振興事業団	開 一夫	1,000,000	乳幼児における人工物・メディアの発達の認識過程
35	財団法人日本宇宙フォーラム	松田 良一	1,239,000	ニワトリの上下感覚は孵化直後に加わる重力によりインプリンティングされる
36	バイオテクノロジー開発技術研究組合	陶山 明	5,250,000	長鎖DNAプローブ設計アルゴリズムの開発
37	理化学研究所	兵頭 俊夫	1,000,000	低速陽電子モデレータの高効率化の研究
38	日本原子力研究所	兵頭 俊夫	1,000,000	陽電子寿命運動量相関測定法による格子欠陥の研究（Ⅱ）
39	財団法人日本宇宙フォーラム	福永 哲夫	4,798,500	宇宙環境における筋萎縮を予防する為の至適レジスタンストレーニング処方の開発
40	国立環境研究所	後藤 則行	1,400,000	平成12年度接続可能な国際社会に向けた環境経済統合分析手法の開発に関する研究
合計			154,244,100	

2000(平成12)年度 共同研究

13.1.9現在(受託決定分)

受入番号	委託団体	受託担当者	金額	タイトル
1	技術研究組合超先端電子技術開発機構	鳥海弥和	4,011,000	分子動力学法を用いた混合液晶系の秩序構造の研究
2	株式会社アートヘブンナイン	福永哲夫	3,003,000	四肢・体幹生体インピーダンス情報からのHQOLの推定に関する研究
3	オックスフォード・インストゥルメンツ株式会社	和田信雄	2,000,000	寒剤供給システムの開発
合計			9,014,000	

* 金額欄は委託団体の負担分のみ

2000(平成12)年度の役職者

研究科長・学部長および専攻・系主任・学科長

研究科長・学部長	浅野 攝郎	言語情報科学専攻主任	宮下 志朗
	平成13年2月15日まで	超域文化科学専攻主任	竹内 信夫
	古田 元夫	地域文化研究専攻主任	石井洋二郎
	平成13年2月16日から	国際社会科学専攻主任	岩田 一政
評議員	浅島 誠	広域科学専攻主任	小島 憲道
	古田 元夫	生命環境科学系主任	繁桝 算男
	平成13年2月15日まで	関連基礎科学系主任	菅原 正
	小林 康夫	広域システム科学系主任	高橋 正征
	平成13年2月16日から	超域文化科学科長	岩佐 鉄男
総長補佐	高田 康成	地域文化研究学科長	黒住 眞
研究科長特別補佐	永野 三郎	総合社会科学科長	山脇 直司
研究科長補佐	小川桂一郎	基礎科学科長	氷上 忍
	内野 儀	広域科学科長	高橋 正征
	平成12年9月30日まで	生命・認知科学科長	大森 正之
	村田雄二郎		
	平成12年10月1日から		
	(建設)加藤 道夫		

総合文化研究科・教養学部内の各種委員長・議長

総務委員会	浅野 攝郎	研究棟管理運営委員会	渡會 公治
	平成13年2月15日まで	留学生委員会	佐々木 力
	古田 元夫	計算機委員会	川合 慧
	平成13年2月16日から	防災委員会	浅野 攝郎
研究科委員会	浅野 攝郎		平成13年2月15日まで
	平成13年2月15日まで		古田 元夫
	古田 元夫		平成13年2月16日から
研究科委員会(議長)	繁桝 算男	国際交流委員会	福永 哲夫
前期運営委員会	浅野 攝郎	奨学委員会	草光 俊雄
	平成13年2月15日まで	放射線安全委員会	渡辺雄一郎
	古田 元夫	放射線施設運営委員会	渡辺雄一郎
	平成13年2月16日から	核燃料物質調査委員会	小島 憲道
教務委員会	兵頭 俊夫	進学情報センター運営委員会	下井 守
予算委員会	小林 啓二		平成12年9月30日まで
広報委員会	国重 純二		鹿児島誠一
	平成12年9月30日まで		平成12年10月1日から
	林 文代	組み替えDNA実験安全委員会	須藤 和夫
入試委員会	吉岡大二郎	実験動物委員会	松田 良一
教育・研究評価委員会	鹿児島誠一	石綿問題委員会	下井 守
図書委員会	小川 浩	学友会評議員	岡 秀夫
学生委員会	中井 和夫	駒場50周年史編纂委員会	義江 彰夫
	平成12年9月30日まで	毒物・危険物管理安全委員会	菅原 正
	福林 徹	学生相談所運営委員会	繁桝 算男
	平成12年10月1日から	学生相談所協議会	浅島 誠
三鷹国際学生宿舍特別委員会	小林 寛道	文化施設運営委員会	鈴木 英夫
		ヒトを対象とした実験研究に関する	
		倫理審査委員会	大築 立志
		教務関係事務電算処理委員会	丹波 清

三鷹国際学生宿舎運営委員会 _____ 松浦 寿輝
平成12年9月30日まで
_____ 遠藤 泰樹
平成12年10月1日から
後期運営委員会 _____ 山脇 直司
将来構想委員会 _____ 浅野 攝郎
平成13年2月15日まで
_____ 古田 元夫
平成13年2月16日から
環境委員会 _____ 高橋 正征
発明委員会 _____ 浅野 攝郎
平成13年2月15日まで
_____ 古田 元夫
平成13年2月16日から
学生論文集編集委員会 _____ 西中村 浩
建設委員会 _____ 浅島 誠

TA委員会 _____ 浅島 誠
技術組織調整委員会 _____ 浅島 誠
スペース・コラボレーション・システム
SCS運営委員会 _____ 鈴木 英夫
健康安全管理委員会 _____ 浅野 攝郎
平成13年2月15日まで
_____ 古田 元夫
平成13年2月16日から
セクシュアル・ハラスメントに関する
相談員 _____ 浅野 攝郎
平成13年2月15日まで
_____ 古田 元夫
平成13年2月16日から
アメリカ太平洋地域研究センター
運営委員会 _____ 油井大三郎

部会主任およびその他の前期教育担当グループ責任者

英語 _____ 木畑 洋一
ドイツ語 _____ 石光 泰夫
中国語・朝鮮語 _____ 刈間 文俊
フランス語 _____ 湯浅 博雄
ロシア語 _____ 桑野 隆
スペイン語 _____ 木村 秀雄
古典語・地中海諸言語 _____ 大貫 隆
法・政治 _____ 岩澤 雄司
平成12年9月30日まで
_____ 道垣内弘人
平成12年10月1日から
経済・統計 _____ 廣松 毅
社会・社会思想史 _____ 柴田 寿子
国際関係 _____ 石井 明
歴史学 _____ 木村 凌二

国文・漢文学 _____ 神野志隆光
文化人類学 _____ 中村 雄祐
哲学・科学史 _____ 今井 知正
心理・教育学 _____ 繁榊 算男
人文地理学 _____ 荒井 良雄
物理 _____ 米谷 民明
化学 _____ 黒田 玲子
生物 _____ 松本 忠夫
情報・図形 _____ 安達 裕之
宇宙地球 _____ 江里口良治
相関自然 _____ 水上 忍
スポーツ・身体運動 _____ 大築 立志
外国語委員会委員長 _____ 木村 秀雄
人文科学委員会委員長 _____ 繁榊 算男
前期課程数学委員会委員長 _____ 舟木 直久

センターなど

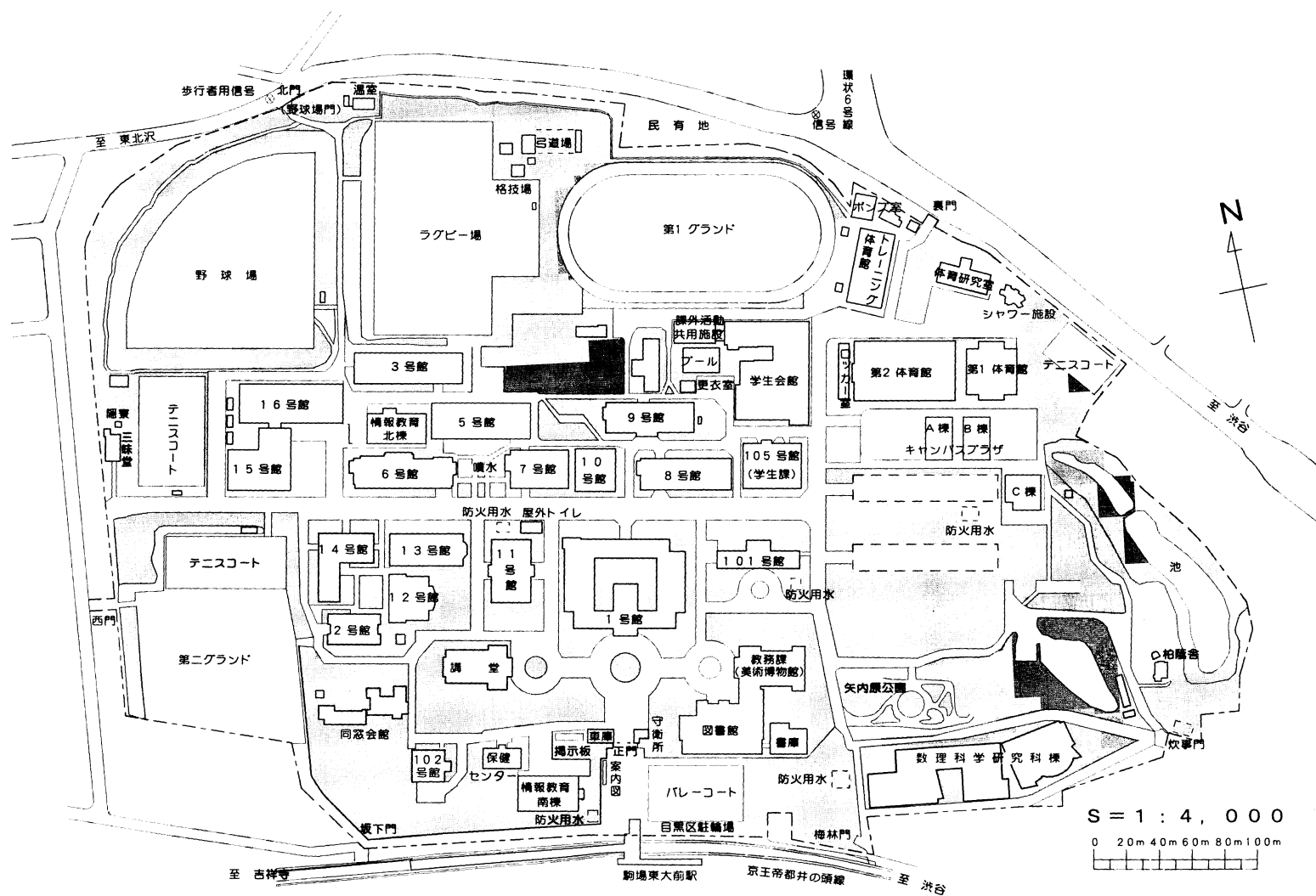
アメリカ研究資料センター
センター長 _____ 油井大三郎
保健センター駒場支所
支所長 _____ 上原誉志夫

共通技術室
室長 _____ 浅島 誠
学生相談所
所長 _____ 浅野 攝郎
平成13年2月15日まで
_____ 古田 元夫
平成13年2月16日から

事務部

事務部長 _____ 有岡 正明
総務課長 _____ 渡邊 隆夫
経理課長 _____ 宮川 雅雄

教務課長 _____ 西 顯一
学生課長 _____ 菊池 力
図書課長 _____ 野澤 稔





[駒場]2000 SUPPLEMENT

平成13年3月31日 発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科

研究科長 古田元夫

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

TEL 03-5454-6004 (ダイヤルイン)

<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/>

編集：教育・研究評価委員会

委員長：鹿児島誠一

委員：市野川容孝 大石紀一郎

大越 義久 岡 秀夫

小河 正基 木宮 正史

高橋 均 丹野 義彦

長谷川寿一 松下 信之

制作：メディアフロント

〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-41-2-506

TEL 03-3373-6521 FAX 03-3373-6527

GRADUATE SCHOOL OF ARTS AND SCIENCES, THE UNIVERSITY OF TOKYO, KOMABA

